
マインドルーラー

白さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マインドルーラー

【Nコード】

N7723P

【作者名】

白さん

【あらすじ】

はあっ！？ おい、約束が違うじゃねーか。魔王を封印したら姫との結婚、そして勇者としての地位を与えるんじゃないのか！？ しかも俺を秘密裏に処刑する！？ あーもういいわ、こうなったら手に入れた心を支配する能力で、お前の大切な国を、特に、一番お前が大事に思っている家族を、めちゃくちやにしてやる。見た目が原因で裏切られた、植崎博の欲望全開外道ファンタジーです。お暇な方はどうぞ。

プロローグ（前書き）

こんにちは、白さんです。この物語の主人公は自分勝手に進んで行くので、そういうのが嫌いな方にはお勧めしません。不快な思いをする可能性があります。それ以外の方はどうか楽しんでいただくと幸いです。

プロローグ

俺は、今牢屋に閉じ込められている。

周りはぼんやりと薄暗く、牢屋の中にある一つの燭台しよくだいが唯一頼りなく周りを照らしている。床に映る自分の影は周りの暗闇に吞まれ、薄く、人の輪郭をとっていた。牢屋の中は汚く、ねずみが走り回る音が響き、キツイ生ごみの匂いが充満している。

ゆっくりと牢屋の壁に背を持たせかけ、ずるずると足を投げ出す様に腰を床へと下ろした。ひんやりとした石造りの壁が、徐々に体温を奪っていくのを感じながら、息を静かに吐き出すように呟つぶやく。

「何故こうなった」

呟いた瞬間、カッと湧き出た感情を押さえつける様な仕草で、乱暴に頭を両手で抱え、うずくまる。

「くそつ、ミナめ、簡単に裏切りやがって。」

あいつの顔を思い出して吐き捨てるように言う。力いっぱいギリギリと歯を噛み締め、顔を酷く歪ませた。

「あーあ、勝手に俺をこの世界に連れてきて、それでも一生懸命に尽くしたこの俺を処刑？ それも理由は外見がクツ、ククククツ悪いからだって？ ぶはっ、あーーひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！ ひiiiiひひひあっははは、はっ、は………は、は………笑えねえよっ！！」

狂ったように床を転げ回り、奇声を上げ、髪をかきむしって、骨が砕けんばかりに壁を殴る。我慢する必要は無い。俺は狂いに狂って感情の全てをぶちまけた。

「あー、もう良いわ。こうなったらどんな手を使ってもお前の大切な国を、特に一番お前が大事に思っている家族を、めちゃくちやにしてやる」

だるそうにゆらりと立ち上がり、ここからどうやって脱出するかを、ブツブツと独り言を呟きながら考え始める。

「あー、もしもし？」

「さて、気持ちを切り替えてと、ここからどうやって脱出するか。うーん、そうだなまずは能力を使って衛兵から鍵を奪い、それから

……」

「私の話を聞いて下さいよー」

振り向くと、子供が俺の腰に向けて腕をブンブン振り回して背中を叩いていた。痛くは無いがうっとうしい。

その子供は背が俺の腰位までしかない女の子で、サイズが合ってなく、帯がない和服のような服を着ている。服は赤を基調としており、白い紫陽花あじさいの柄が入っていた。服がブカブカなため、袖は腕そでの二倍もの長さがあり、裾すそに至っては完全に床についてしまっている。目は透き通った紫色で、綺麗な腰まである髪は赤紫色をしていた。

「あーすまんすまん、いや、別に嫌がらせで無視していた訳じゃないぞ？ ただ一刻も早くここから出たいからな。能力をどう使って脱獄だつこくするか考えてんだ」

「それは良いですけどまだ契約をしていませんよ。このままじゃそ

の能力も使えませんし」

「えっ、マジで？」

「だから早く契約をしましょう」

「おーけーおーけー、でどうするんだ？」

「じゃあちよっと待って下さいね。今準備をしますので」

そう言つと両手を思いっきり開き、上を仰いで腕を勢い良く上に振り挙げた――

――瞬間

ダーーーーーッと彼女の足元から紫の光の線が電子経路のように床、壁、天井と広がっていった。彼女の髪や服は強風に吹かれたかのようににはためく。

呆氣にとられていると、彼女は開いていた手をぎゅっと握つて、何かを引き延ばすようにグググつと両腕を横に大きく開くように広げていく。両腕が水平までになると腕の動きが止まり、それと同時に髪や服がおさまった。

不意にカクツと操り人形の糸が切れる様に、仰いでいた顔が下を向き、ゆっくりと正面を向いた。

「では、これから契約を開始します」

先ほどまでの子供っぽい声とは一変し、たんたん 淡々した声で話し始めた。機械的なその表情に、思わず一歩後ずさる。

「ではまずお互いの体液を交換しますのでこれを」

彼女はそんな俺の事を全く気にしていない様子で、俺が投げたナイフを拾い再び自分の腕に刺すと、何やら呟き始めた。

「両者の体液を媒体に、隠密を司る者は心奥を支配する者と今此処に契約を結ぶ」

ナイフを腕に刺したままこっちに歩いてくる。

「従者となる者が主人になる者へ主従の紋様を献上」

彼女は腕のナイフが刺さった部分から滴っている血の滴を指に付け、俺の首に当てた。

「ひいあつ」

一瞬、指が当たっている部分で、何かが俺の首の表面を広がるように這いまわる感触が襲い、情けない声を出してしまった。

「刻印完了。能力の覚醒を開始」

いきなり目の前が歪み始め、意識がだんだんと遠くなり、周りがぼやけてきた。水の中にゆっくりと沈む様な感覚が、全身を包み込んでいく。

ああ……あの時と同じ感覚だ。

俺は意識を失った。

第一話（前書き）

ブログと一緒に投稿つと。

第一話

俺は上崎博うえさきひろ、何処にでもいそうな普通の高校生だ。

「やばいやばいやばいやばいーーーーー！」

俺は今、しきりに後ろをチラチラと確認しながら夜の住宅街を全力で走っている。夜中に大声で叫ぶのはマナー的にどうかと思うし、余計な体力を使うだけだが正直そんなことを考えられるような余裕は無い。

後ろの曲がり角から、何十本もの黒い手のようなものが俺に向かって伸びてくる。

「うわー！ まだ追ってきたーーーーー！」

俺は捕まらないようさらにスピードを上げようとするが、足はもう自分の体という感覚がしない。まるで足が神経の通っていない全く違う物質になってしまったみたいだ。ああ、そうか。これが足が棒になるというやつか。後ろを見ると黒い手はまだ追って来ている。先ほどよりもだいぶ距離が近くなっているみたいだ。きつと追いつかれるのも時間の問題だろう。

くそっ！ 何でコンビニに寄った帰りにこんな化け物に追いかけられるんだ。こんな化け物に捕まって殺されるのは御免だ。

「はあっ はあっ はあっ いっつ ぐっ ふはあっ はあっ」

だめだ、頭がボーとしてきた。もう限界が近いのだろう。筋肉が

軋^きむような感覚が足から脳へと伝わってくる。ただ息をするだけで肺や喉が刺すように痛む。

「はあっ はあっ ひはあっ！ はっ はあっ すはっ はああ
ごうほっ！ ごうほっ！ はあ げほっ！」

やばいつ、もう俺に手が届きそうだ。

「捕まっつて、たあーまるか――――――――――
――！」

カクン

「はい？」

不意に右足に力が入らなくなり、バランスを崩した俺は走っていた勢いも手伝って、擦り傷だらけになりながら2、3回転がる。見てみるといつの間にか黒い手が右足に巻き付いており、黒い手に触れている部分からどんどん力が抜けていく。

やばいやばいやばいやばいやばい

黒い手はどんどん集まって来て、体中に巻き付いてきた。必死に抵抗を試みるが、全く体に力が入らない。俺は抵抗ができぬまま連れ去られていった。

しばらく運ばれていると、魔方陣のような模様が地面に書かれているのが見えてきた。見てみると黒い手はそこから生えているみたいだ。黒い手は俺を模様の元までぐんぐん引っ張っていく。

「うおっ」

黒い手は俺を模様の近くまで運ぶと、不意に俺を模様の上に放り投げる。するとその瞬間、今まで抜けていた力がぐつと体全体に戻った。

しめたっ

力が入ることに気がついた俺は、すぐ立ち上がって逃げれるようにまず受身を取――

「ぎゃっ!？」

――れなかった。

俺の体は硬いコンクリートにぶつかる事は無く、ドボンと何故か模様に沈んでしまった。

うわぁ、何で模様のところが沼地みたいになってるんだよ、しかもまた動けなくなってるし。なんかこの液体ねっとりしてて気持ちわりい。驚いた拍子に少し飲んじまった。。。。

あれ？ 意識が薄れてきた。このまま溺死とかしゃれになら……
ねー……………。

「ん？」

あれ？

いつの間に寝たんだっけ？……………。

え〜と。確か俺は、、だめだ、寝起きのせいか頭がぼーとして
思い出せない…………まあ良いや、眠気覚ましに顔でも洗ってくるか。

「ふわあゝあ」

俺は必死に閉じていようとするまぶたをゆっくりと一分位かけて
目を開き、手を組みあくびとともに腕と足を伸ばす。また一分位か
けて体を起こし、掛け布団を体からどかしてベッドから降り…………
…あれ？

俺の家にベッドなんてあつたっけ？

周りを見ると西洋っぽい豪華な装飾の置物や高そうな絵が飾って
あり、部屋の半分もある金色のシャンデリアが天井についている。
部屋の四隅にはこれまた銀色の、とてもディテールが凝っている

柱が立っていた。

「……………」

あるえ？

え？ え？ え？ いや、どうなってんの？ 何で俺がこんなところで寝てんの！？ ち、ちちちようっと待て。まず落ち着け。思い出すんだ。

えーと、俺は、た、し、か、……………あーそうそう。黒い手に追われて連れ去られて溺れたんだ。

「……………」

で、ここはどこだ？

「……………（思考中）」

……………だっ……………！ あーも……………わかんねー……………！

俺は両手を広げ、そのまま仰向けにベッドに倒れこむ。だめだぜんぜん思い出せない。

はっ、もしかして夢遊病というやつか？ たしか寝ているままそこからしこを歩きだしたりする病気だったはず。さらにただふらふらと歩くのでは無く、階段もしっかり上り下りできて、恐ろしいことに眠ったままなのに食事をする者もいるらしい。どこの麦わら男だよ。

たしか夢遊病になる人は少なからず何か欲求不満などがあるらしいけど俺はそんな不満なんて……………いや待てよ、こんな金持ちの家に入ったってことはだ、今の暮らしが貧乏だと、それが不満だと、深層心理的な所で感じていたんだな。

うわ、俺すっげー悲しいやつみたいじゃないか。まあ良いや、ともかくこのままじゃ不法侵入で捕まるよな？ さっさとんずらするか。

「あつ起きたんですね」

「っ！」

慌てて俺はいつでも逃げられるように扉から距離を取り構える。ちなみに構えた体勢は、両手を握った状態で肘を曲げたまま腕を少し前に出し、中腰の体制で腰が引けているという構えだ。しかも突然のことに驚いていたので、目を見開き口をぽかんと開けている。傍から見たらあほに見えるだろう。

目の前には部屋のドアノブを握っている白いドレスを着た、とても可愛らしい金髪の少女がいた。お人形さんみたいという言葉がぴたりと合うような、浮世離れた愛らしさを彼女は持っている。彼女は俺の体勢を見て顔をこてんと傾かせ不思議そうな視線を俺に送る。

「その体勢はどうしたんですか？ あつ、そうそう一応着替えならそのクローゼットに入ってますから好きに着て良いですよ。もう食事の用意ならできていますので、着替えたら食堂まで来て下さい。食堂までは部屋の前にいる衛兵に言っておいたので、案内してもらって下さいね。」

「へ？」

事態を呑み込めていない俺は間拔けな声を出してしまった。

「えーと、ですからね、着替えて部屋の外の衛兵にね、食堂へまで案内をね、してもらいなさいって言ったの。わかりました？」

彼女は小さな子供に言うように、言葉を小さく区切って優しい口調で俺に説明をした。

ともかくここは適当に返事しておいた方が良さだろう。

「わ、わかりました」

「じゃあ私はさきに行っていますね」

「は、はい」

彼女はドアを閉めて行ってしまい、部屋には状況をつかめていない俺だけが再び取り残された。

第一話（後書き）

とくに主人公の名前には由来は有りません。直感で付けました。

第二話

「何故こうなった」

「ん？ どうしたのかね口に合わなかったか？ 良かったら君の要望どりの料理を衛兵にまた作らせるが」

王冠をかぶり王様髭おうさまひげを生やしている男が話かけてくる。

「いえ、結構です」

「そう、遠慮しなくても良いのよ？ 若いんだからしっかり栄養を取っとかないと」

今度はティアラを付けた綺麗な女の人が話かけてくる。

「いえ、本当に結構です」

俺はばかでかい食堂にある、端が見えないんじゃないかと思うほど長く大きいテーブルに座って、料理を振る舞われている。しかも俺の隣には先ほどの美少女が座っており、（なんか俺との椅子の間隔が狭い気がする。若干こちらへしだれかかっているし）目の前には彼女の両親らしき人が、王冠おうかんorティアラをかぶったまま座っている。

物凄く緊張するんですけど。

いや、別に彼女やその両親の現代日本らしからぬ格好や、如何いかにも高そうな料理が原因ではない。

テーブルの周りや壁際で監視するように立っている、甲冑かっちゅうを着た衛兵達がさつきから睨んでくるからだ。

甲冑と言っても武将が着る様なものではなく、RPGに出てくる様なフルプレートアーマーから、監視をしやすくするためかヘルムだけを外した格好をしている。

俺はしがない一般日本人だ。よって日本式の食事作法ならともかくナイフとフォークを使った小難しいテーブルマナーなど全く知らない。それ以前にファミレスでジューシー海老フライ付きハンバーグ(税込780円)を食べる位しかナイフ使わない俺は、致命的なほど食べ方が汚い。その証拠に先ほどからボロボロこぼしてしまっている。

それで食べ物や食器を落したりするたんびに一齐に衛兵達がこちらを睨み、一番近くの衛兵が怒ったように足音を鳴らしながら来て落とした物をかたづけ、ごみを捨てに去って行く。もうやだここ、早く家に帰りたい。

つーか何で家事さえも衛兵にやらせんだよ！普通はメイドとかにやらせるよな？メイドがもしいないとしても衛兵を雇う費用をメイドに回せば良いだろ？いまじゃ萌を全面に押し出したような店のなんちゃってメイドしかなくて、ちゃんと雇うような正式なメイドなんて時代錯誤も良い加減にしろだつて？ばか言うな、甲冑の衛兵の方が古いわ！それなのに何故あえて家事まで衛兵にやらせる？ 恐ええんだよ！

幸い彼女とその両親は俺の汚い食べ方を全く気にしていないが、このままだと怒り狂った衛兵によって、テーブルの純白のクロスは俺の体液で綺麗な赤い柄が彩られてしまうだろう。

それを避けるには何も食べずにじっとしておくのが一番良いが、

この二人は先ほどから実家に帰った時の両親のようにやたらと俺に料理を食べさせたがる。だから何回も丁寧^{ていねい}に断っているのだけど、なんか断る度に衛兵達の表情が険しくなっていく。あれか？ このお二方の誘いを断るなんて恐れ多いことしやがって、切ってやるのか？ あん？ 切ってやるのか？ って感じか？ どないせーっちゆうねん。これぞ八方塞がり、前門の虎後門の狼。もう泣きたい。

しばらく薦められる料理を断りながらブルーな気分になっていると、ドアを開け、ヘルムも着用している衛兵が食堂に入ってきた。やはりヘルムを付けていると迫力が違う。といっても周りで殺気を混ぜて睨^{にら}んでくる奴らには敵わないけどな。で、何しに来たんだ？

衛兵はそのままこちらへ近づいてきたが、テーブルの周りの衛兵に引き止められ何かを話し合っている。

しばらくすると話し終わったのか再びこちらに来てテーブルの前に来ると直立姿勢で止まりビシッと敬礼をした。

「お食事中恐れ入りますがそろそろお時間です。御準備をお願いします」

衛兵は敬礼の姿勢のままで話す。

「おお、そうか。ではもうそろそろ行くとするか」

目の前の王冠をかぶっている方がそう返事をする、彼女とその両親が椅子から立ち上がった。どこへ行くのだろうか。もう俺は帰って良いのかな？

両親の方は先に食堂のドアを開け廊下へと出て行った。

「ではさっそく行きましょう」

そう言い彼女は俺の手を握ってぐんぐん引っ張って歩いていく。

「って一体どこに行くんですか。できれば帰らせてもらいたいのですけれど」

面倒な事は御免ださっさと帰ってしまおう。

「大丈夫です。説明なら着いた時に詳しくしますので」

彼女は手を引っ張りながらこちらを向くとニコリとしてまた真っ直ぐ前を向いてぐんぐん進んでいく。

「いやいやいや、私はどこに行くのかを聞いたんですけど。着いてから説明されても意味ないじゃないですか」

「大丈夫です。説明なら着いた時に詳しくしますので」

「だから大丈夫じゃなくてどこに行くのかを聞いてるんですって。一言だけでもその位説明できますよね？」

「大丈夫です。説明なら着いた時に詳しくしますので」

でたよRPG式悪夢の無限ループ。どう言っても同じ回答が返ってくるのか勘弁してほしい。

って、俺を睨んでいた衛兵たちが青い顔をしながら俺を見てなんかこそ話している。どうしよう、さっきまで俺に憎しみを向けていた人がする反応じゃ無いよ。もしかして俺、物凄くやばい所に連れていかれようとしてる？

俺の動揺を知ってか知らずか彼女は俺の手を握ったまま黙々と進んでいった。

第二話（後書き）

次の投稿は元旦ぐらいになると思います。

第三話（前書き）

お気に入り登録をしてくれた人達に感謝。

第三話

「では今から説明をしますが、その前に自己紹介をしましょう」

今俺は、この小さな部屋にあるテーブルの椅子に彼女と向かい合うように座り、話をしている。小さいといってもこの家の他の部屋と比べたらであり、普通に俺の部屋の三倍位の広さはある。

それにしてもコイツん家はどんだけ広いんだ？ 廊下も突き当たりがすごく遠かったし。もう金持ちの家と言うよりも、城とか宮殿並みはありそうで恐い。

「まず私の名前はミナ・オーカット・コルクスと言います。ミナと呼んでくださいね。あなたの名前は？」

やっぱり外国人か。いや、ぶっちゃけその金髪で日本人だと言ったら、普通に引いてたけど。髪を染めている人〓不良の方程式が俺の中で確立しているし。

「植崎博って言います。そちらの言い方だとヒロ・ウエザキですかね、ヒロって皆から呼ばれています」

自分の名字と名前の順番をひっくり返して言ったのって英語の授業だけだけど、いちいち逆に読むって位は言わなくても知っていると思うから、説明をしなくても良かったかな？

「そんなに畏まらないで下さい。敬語は使わなくて結構です」

「ですけどミナさんも私に敬語で話していますよね？」

「さんは付けなくて呼んで下さい。あと元々私の口調が敬語なので、

気にしなくて良いですよ」

さいですか。

「じゃあ普通に話すからな。あと質問。俺は何であんな所で寝ていたんだ？ 俺はこんな人様の家で寝て無かったはずだけど」

「それなら今からする説明を聞けば分かりますよ。他に何かありますか？」

「無いよ」

ミナは人差し指を立てて話し始める。

「まず何でもここにいるかという質問ですけど、簡単に言えば魔法陣を通って、この世界に召喚されたわけですが……」

「はいストオーパー！」

右手を広げ、その手をミナの顔の前に突き出しながら叫んだ。

「え？ え？」

ミナは目をぱちくりさせながらおどおどする。

てゅーか困惑したいのはこっちだよ。

「え？ じゃなくて何なんだよ魔法陣とか召喚とか。何？ もしかして怪しげな宗教に入ってるの？ 残念だけどそういうのに全く興味ないからね？ 入信させようと思っっているのなら諦めてくれ」

こういう勧誘にははつきりきっぱりと断らないと、ずるずると引き下がれなくなっていくから、嫌だとしっかり示しとかないとな。

すると、なにやらミナは頭に手を当てて「あー、そうでした。分かるはずがあるませんよね」と呟いた。まるで理解力の無い生徒に、どう説明するかを考えている教師のようだ。その生徒がミナの中では俺なのが、無性にムカつく。

「見てもらった方が早いですね」

そう言つとミナは指を鳴らす。

その瞬間、目の前に真つ赤な火の玉が現れた。

「うわっ、つていたっ」

俺は急に出てきた火の玉に驚き、椅子ごと後ろに転んでしまい頭を強かに打った。めっちゃ痛い。

「大丈夫ですか!？」

「いってー、今で頭がばかになったらどうすんだよ。ってかこの火の玉は何？」

「私が魔法を使って出した物です。」

「ほわっつ?」

「まずこれは子供も使えるもつともポピュラーな魔法の一つです。余りにも有名で、火を付けると言えば通じるので名称は特に無く…

…」

「まてまてまてまて」

「何ですか？」

キョトンとした表情を浮かべるミナに対し話し始める。

「だから、ちょっとそういうのは無理。いきなりそんなこと言われても悪いけど信じられないから。それでも魔法だとか言い張るなら、証拠を見せてよ証拠」

「……」

黙ったままずっと指の先を先程の火の玉に向けた。

「いや、あれは上から細い紐ひもで吊した松明とかが燃えてるんだろ？」

火の玉の上に手を伸ばし、あるはずの紐に触ろうと、火の玉の上で何度も手を往復させてみる。結果は何にも当たらず、ただ手が宙を切るだけだった。

「あれ？ おつかしいな」

紐じゃないのか？

「松明の中に磁石でも入っているのかな？」

じっと火を見つめる。何かがおかしい。

「火の玉の中に何も入っていない？」

火は核となる物質が燃える事で起こる。でも現に目の前で何も無い所から火が出来ているのだ。火の無い所に煙は立たない、そして何も無い所に火は起こらないはずだ。と、すると。

自分の顔が引きつっていくのがはっきりと分かる。

「本当にこれ魔法ですか？」

余りの出来事に口調が敬語に戻る。

「本当です」

「……」

「……」

「じ、じゃあ魔法陣を通って、この世界に来たと言っつのも？」

「ええ」

「……」

「……」

「だけど帰れますよね？」

「無理です」

だからファンタジーっぽい感じの衛兵や家だったのかー。ま、い
つかどうせ帰るのなら問題無いし。珍しい経験したなー、という程
度の認識で良いだろう。現にミナも帰るの無理だって言ってるんだ
から、さっさと帰って……。。

「ん？」

さっきミナ何て言った？

もう一度質問をする。

「帰れないんですか？」

「そうです。済みません」

ペコンとミナは頭を下げる。

帰れないとか勘弁して欲しいわ。

「何で？ 別に今すぐじゃ無くても良いから何とかできない？ 魔法陣を通してここに召喚したなら、その逆をすれば良いんじゃないの？」

「それが……………」

ミナは言い淀み、やがてゆっくりと言いにくそうに続けた。

「こちらのミスで出来なくなりました……………」

「どゆこと？」

ミナはまた指を一本立てて、話し始めた。

「まず、召喚魔法には、他の場所から呼び出す召喚と、殆ど使われませんが、こちらから他の場所に飛ばす召還があります。」

それで、とミナは続ける。

「呼び出す召喚魔法は、ある程度の条件、例えば性別とか年齢だとか範囲を絞り込み、その条件に合った物をランダムに連れて来ます」
「なるほど」

「それで、問題なのが飛ばす方の召還魔法です。どちらかと言うと、

混乱しない様に別名の転移魔法と言う方が一般的です」

ミナはさらに続けて話す。

「転移魔法は座標を決め、そこに何かを送る魔法です。よって正確な座標が必要となり、それがなければ元の場所に帰すことはできません。普通は召喚魔法を使い、そして呼び出した物を元の場所に戻す必要がある場合は、呼び出した物の場所の座標を調べる解析魔法を、召喚する時に使うのですが……」

「ですが？」

「実は解析魔法を使うのを忘れてしまいました」

物凄く寒い間がこの部屋に立ち込める。

え？　じゃあこのまま一生異世界で過ごすの？

異世界で過ごすって俺はどうなるんだ。こんな全く知らない所で生きていけるのか？　元の世界の常識が通じるとは限らない、そんな所に来されたって一人で生きていけるはずがない。いや、俺にはミナがいる。こんな豪邸に住んでいるんだ。きっと俺を勝手に呼び出した事もあるし、なんとか生活が営める位は面倒を見てもらえるだろう。だけどこっちの事情も考えずに呼び出した奴なんか、当てにできるのか？　もしかしたら元の世界の人間と考え方が同じだとも限らない。今まで友好的に接しているといっても本当に俺に危害を加えないとは言えない。というよりやっぱり全部嘘だったんじゃないか？　異世界なんて本当に存在するか？　駄目だ駄目だ！　さっき見たのを忘れたのか！　紛れもなく本物の魔法だった。じゃあどうする。どうすれば良い。あゝもう、混乱してきた。

「てことは本当に、ほんとに、帰れないんですか？」

「あつ！ でも一つだけ帰れる方法がありました」
「ほんと！？ 本当にほんとか！？」

俺はテーブルから身を乗り出してミナの顔、ギリギリまで顔を近づけて大声で言った。

よしっ！ 帰れるっ！ 帰れるんだ俺はっ！ ああ、いざ帰れると分かったら何だか名残惜しくなるもんだなあ。何だか部屋にある物全てに愛着が湧いてきた。やっぱりここまで心を豊かにする故郷って大事だな。それを気づかせてくれただけでも、この異世界には感謝しなければならなйдらう。

「まあ、方法と言っても良いか分からないようなごり押しなんですけども」

「ごり押しでも何でも良いっ帰れるならば何でも良いんだ！」

「で、その方法ですけれど」

「はいっドンと言っちゃって下さいミナ先生！」

「座標を決めずにランダムに異世界に送る方法です。ただ失敗する可能性が殆どなんです」

失敗する？ じゃあ何回もやり直さなければならないうてことか。帰るためなら何回でもやり直してやるけど。とすると一日で終わらない可能性もあるな。ならこの素晴らしい異世界に、もっといられるってことか。やばい超嬉しい。

「で、ちなみに大体何回やり直せば、元の世界に帰れますかね？ 十回？ 百回？ それと一回するのにどの位かかりますかね？ 十分？ 一時間？ 元の世界に帰るのは一週間位なら大丈夫なので、ゆっくりやっても良いですよ」

「そうですね、呼び出すときには解析魔法が使えるんですけど、送

るときは使えないんで、また呼びもどしてやり直しとはいきませんのでチャンスは一回です。あと転移魔法は発動してから三年後に使えるようになります」

え？

「な、ならどの位の確率で元の世界に帰れるんですか？」
「そうですねえ」

ミナはおでこに片手を当てて考え始めた。頼むっ、せめてできるだけ高い確率になってくれ！

「異世界は無限にあるらしいですから、ざっと無限分の一です」

彼女は死刑判決を綺麗な笑顔で言い渡した。

「そうですか、は、はは……………」

異世界なんて大っ嫌いだっ！！

第三話（後書き）

第四話

「何故こうなった」

「どうしたんですか？」

俺はテーブルに突っ伏してこの状況に絶望する。無限分の一つてなになに。つーかどうしたんですかじゃねーよ、お前のせいになっただろが。

「ともかく俺はこれからどうすれば良いんだ？ 勝手に召喚しておいて、はいさよならって事はねーよな？」

顔を持ち上げて睨みつける。これでさよなら、好きに生きて下さいと言ったのなら顔面ぶん殴る。ああそうだよ、全身全霊全力を込めて殴ってやる。相手は女だって？ 男女平等舐めんなコラ。

「この世界にお呼びしたのは幾つかお願いがありました」

出たよお願い。勝手に呼び出しといてお願いするとかマジねーわ。なんか凄くイライラしてきた。でも全く予想してなかった訳でもない。こっちの利益次第ではその要求を飲んでやろう。

「そのお願いは俺にもメリットは有るのか？」

「はい、実は勇者様になって頂きたいのです」

身を乗り出して、嬉しそうにミナは言った。

「勇者になるってどういうこと？」

「簡単に言えば勇者様に魔王を退治して欲しいんです」

「何言ってんだ。俺は別に武術を習っていた訳でもないし魔法も使えないぞ?」

まさか勇者と言うのは魔王を静める生贄でしただっていうオチじゃ無いよな? 後、なんかミナがもう俺の事を勇者様って呼んでるし

……

「いえ、別に勇者様自体が強く無くとも問題ありません。ただ異世界の住民と言うのが重要なのです」

「何で?」

「魔王を退治するには代々伝わる特殊な石を使い封印をするのですが、それは他の世界の住民にしか扱えないのです。原理は分からないんですけども、この世界へ呼ばれた人達は皆不思議な力を身につけて召喚されるらしく、その力を代償にすることで初めて石の封印の力を使えるようになるのです」

不思議な力? 別に何とも無いんだけど。

「だけどこれと言って何か力が付いた感じは無いけど」

「その力なら召喚した際に代償にして勇者様が石の力を使えるようにしました。でも多少は能力の残片が残っている可能性もあるので、いきなり使えるようになるかもしれません。もしもその残片が残っていた場合は体にも何らかの変化がほぼ必ず起きるので、以前よりも少し力が付いたり、目が良くなっていたら、きっと能力が使えるはずです。ただ、所詮残片なので微々たるものだと思いますが」

「ふーん。で、もう一度聞くけどメリットは何なんだ?」

「ですから勇者様になつていただく——」

「だーからー、その勇者様になることで何のメリットが俺にあるのか、それとも他にメリットがあるのかを、教えると言ってるんだよ!」

勇者になるという名誉が、俺に対する唯一の十分なメリットになりますとかを抜かしやがったら……………

拳を硬く握り、いつでも出来る様にスタンバイしておく。

ミナは俺が急に大声を出したので軽いパニックになっているようだ。しばらくすれば収まるだろう。

「え、ええと、あつ！ 勇者様という地位は王族と同じで、あらゆる面で優遇されますので生活面では困ることは全くありません。そして魔王を倒した暁にはこの国の姫との婚約、つまり私と結婚できます」

おお、こういうのを待ってたんだよ。それにしてもミナはお姫様だったのか。とにかく王族と同じ地位が貰えるってのは凄くおいしい。王族と言うくらいだ、たとえ異世界だとしてもかなりの生活が保障されるだろう。その上、さっきまでミナの顔を殴るうか悩んでいた俺が言っのはおかしいかもしれないが、こんな美少女と結婚できるなんて十分なメリットだ。魔王を封印するのがどの位大変かによつては釣り合わなくなるかもしれないけどな。ただ問題は……

「その結婚はミナとしてはどうなんだ？」

「え、どういう意味ですか？」

「報酬としてしょうが無く嫌々俺と結婚しようと思うのか、報酬だとしても本当に結婚した後も俺を愛せるのかを教えてくれ」

結婚をした後で、俺なんかと結婚なんてしたくなかったと言われる危険がある。正直、愛とかを言うのは恥ずかしいが、これだけは確認して危険を回避しとかないとな。

「どちらでもありませんよ」

どちらでも無いって……………？

意味が分からず、頭の上にクエスチョンマークが見えそうな程腕を組んで頭をかしげた。

ふふっ、と悪戯っぽく笑うと、俺の右手を両手で包み込むように握って話す。何だか顔がほんのり赤くなっていた。

「報酬とか、姫とか関係無しに、私は勇者様と結婚して一生愛し合いたいと思っています」

「……………」

う……わ、なんか逆に不安になってきた。会ってから一日も経っていない男相手に、一生愛し合うとか言うなんてかなりうさんくせえ。どう考えても報酬とか、姫とかが関係してる。

「なんでそんな事が言えるんだ。会ってから殆ど経って無いような相手に一生愛し会いましょうなんて普通は言わないぞ？ もう一度聞く、結婚の事をどう思っているか正直に答えてくれ」

さあ、どう出る。

「何回聞かれましたも一生愛し合いたいと思っています。だって…

…」

「だって？」

「勇者様がカッコ良いからです。最初にお顔を拝見した時に一目惚れをしてしまいました。どうか魔王を倒して私と結婚してください

！
」

一瞬、部屋の時間が止まった（と感じた）。

は？ いやいやおかしいおかしい、俺がカッコ良いだつて？ 席
替えて隣の席になった女子がマジ泣きする俺が？ 体育の授業で二
人組を作るといつも先生と組む事になる俺が？ 友達がいないから
昼休みの間、寝たふりをして時間を潰す俺が？ 自分自身でもはっ
きりブサメンだと分かっている。それなのにカッコ良い？ 異世界
の人達はもしかして俺の世界と美的感覚が違うのか？ それとも俺
をばかにしてんのか？ あっ！ ま、さ、か。

「南無三つ！
なむやん」

素早く立ち上がり、ポカンとしているミナをしり目に、部屋にあ
る化粧台の鏡の元へ全速力で走る。途中で椅子を蹴飛ばしてしまっ
たが、気にもせずに一刻も早くたどり着こうと走った。

「はあっ、はあっ」

鏡の前にたどり着いた。大した距離を走った訳でもないのに呼吸
は乱れ、顔には赤みがかかり、汗がとめどなく流れている。しばら
くは中腰で両ひざに両手を乗つけて、顔をうつむけていたが。呼吸
が整うと恐る恐る顔を上げた。

「うわーーーーーーー やっぱりーーーーーーー
！！」

黒い髪と瞳、これは別に問題ない。だが、それ以外は全く違う造
りになっていた。背は高くスラリとした体形、そばかすなど無い綺

麗な白い肌、女性的な美しさも兼ねた中性的な顔になって完全な美形、いわゆるイケメンになっていた。

いや、別にイケメンでも本当の顔じゃないから全然嬉しくない。

俺はガツクリと肩を落とし、いつもの口癖をまた呟く。

「何故こうなった」

第五話（前書き）

今回は説明が多いです。

第五話

あの後もしばらく鏡の前に崩れ落ちて愕然としていたが、何事かと駆けつけてきたミナが一生懸命励ましてくれたお陰で、まだ完全では無いがなんとか持ち直す事は出来た。今思うと女の子に励まされてる姿はさぞかし情けなく見えただろう。部屋に衛兵とかが居なくて助かった。その後もミナは心配して休ませようしたが、まだ聞きたい事はたくさんある。なんとか押し切ってテーブルに座り、今はミナが淹れた果実入りミルクを飲みながら話をしている。

「いや、さっきは心配かけてすまん」

「それにしてもどうしたんですか、いきなり走り出して鏡を見たと思ったら落ち込み始めるんですから、ビックリしましたよ。」

「あーその、悪かったって」

「やっぱりベッドまで案内しますのもう寝て下さい。いきなり異世界に来たから疲れたんですよ」

「いや、本当に大丈夫だから。心配しないでくれ」

「いーえ、だめです。体調が悪いのに病気にでもなったらどうするんですか」

「別に体調が悪い分けじゃないってば。あつ、そうそうこれに入っている果実って何？ このミルク、凄く甘くて旨いんだけど」

まずは話を逸らしとこう。

「はい、そのミルクならメレムという果実の果汁が入っています。メレムは栄養価が高く、安価に手に入るので今では国民に多く広まっている果実です。この王国では体調の悪い人や病人に、この果汁を入れた飲み物を飲ませるのが、風習になっています」

「ふーん、そうなんだ」

よし、なんとか話を逸らせたな。とにかく何故全く違う姿になったかを考えよう。そういえばミナがそんな感じの事、前に言っただけだったわけ？ えーと、あっ思い出した。これか、能力の残片が残っている時に起きる体への変化というのは。不思議な力を使えるのは嬉しいが、ここまで姿が変わると自分じゃない人の体を借りているような違和感があつて、正直気持ち悪い。とにかく召喚の影響という事はきつとミナがなにかしら対処法を知っているはずだ。仮にも実際に俺を召喚した張本人だからな、召喚に関しての知識は有るはず。ちやつちやつと治す方法を聞いて元の姿に戻ろう。

「ミナ、ちよつと質問して良いか？」

「？ 答えられることならなんでも良いですよ」

「能力の残片の事なんだけど、体への影響が体力が無くなるとか、耳が遠くなるとか悪い影響だった時はどうやって治すんだ？」

「今まで良い影響しか出てきていないので良く分かりませんが、もしそうなくても体への影響は能力の一部なので実質治すのは不可能です」

「そ、そうか、教えてくれてありがとう」

「いえ、勇者様のお役に立てて嬉しいです」

あー、くつそ駄目か、だけどミナがたまたま戻す方法が知らなかっただけでも知れないからな。違和感もしばらくすれば無くなるだろうし、元に戻る方法を見つけるまでの辛抱だ。そういえばミナに能力が使えるかもしれない事を話して無かったな。でも後にしておこう、まずは情報収集が先だ。

「そういえば幾つかお願いが有ると言っていたけど、勇者になる以外にも何かあるのか？」

ミナは思い出したようにああと言う。やっぱりか。

「それなら、先程話しました魔王を倒した後の私との結婚です」
「と言うと、本当は結婚をするのは報酬ではなかったってこと？」
「お願いでもあり、報酬でもあると言った感じですね。魔王を倒すのですから、王族になってもらった方が色々と便利なのです。政治の道具にする為に結婚させるのかと思うかも知れませんが、先ほど言ったように、私はそんな事は関係なしに勇者様を愛しますので安心して下さいね」

ミナはそう言うつと椅子から立ち上がり、俺の手を握る。何なのだろうか。

「ではそろそろ儀式場に向かいますので付いてきて下さい。そこで儀式を行い、勇者様の力を代償にして解放された封印の石を、儀式場に置いてある道具や魔法陣を使って体に埋め込みます。でも物理的に埋め込む分けではありませんし、体に異常は起きませんので心配する必要は全くありません」

ミナは急に俺の手を握ったまま廊下へと歩き始めた。

いきなり歩き始めると思っていたいなかった俺は、グンと手を引つ張られバランスを崩し、こけそうになりながらも慌ててミナと歩調を合わせる。

「いきなり何だよ、まだ聞きたい事は有るからちょっと待って」
「大丈夫です。勇者様の質問なら歩きながら答るので問題ありませんよ」

「じゃあ魔王ってのはどんな存在なんだ？俺の世界では魔王は物語にしかない架空の存在だから、俺の持つ魔王のイメージと実際の

魔王が違つかもしれないからな」

「それがあまり分かっていないのです。一説には勇者様と同じく異世界から召喚された者だとか、膨大な数の魔族の魔力が寄り集まって出来た生き物だとか、何の証拠もないいわさばかりが出回っています。分かってるのは人間の敵という事と、召喚された者と同じく何か不思議な力を持っている事位です」

「へえ」

すると廊下の突き当たりが見えてきた。だが突き当たりには何のドアも無く、このまま歩いていてもぶつかるだけだ。まあ、別に壁にぶつかるまで歩き続けるばかりはいないと思うが。

「ちょっと良いか？　なんか行き止まりっぽいなだけど」

「それは扉を仕掛けを使って隠しているんです。少し待っていて下さい」

そう言つとミナは床の赤いじゅうたんをめくってコツコツと叩き始めた。

「ここをこつしてつと」

ミナが先ほどよりも強めに床の一部を叩くとカチャツと鍵が開くような音がした。突き当たりを見ると、ずずず、と壁がゆっくりと上に上がっていき、その壁が隠していたドアが現れる。

「入りましょう」

ミナは俺をドアの前まで手を引っ張り連れていく。

見た目は特に他のドアと変わらないな。金色のドアノブを掴み回

してドアを開けた。

「おいおい、なんか本当に不必要なほど儀式場って感じがするな。邪神でも呼び出すつもりかよ」

ドアの向こうには余りにも禍々しい空間が広がっていた。部屋の中心には血のように真っ赤な魔法陣と思われる、直径約三メートル程の様子が黒い床に描かれており、その周りには火が灯っている真っ黒な燭台が取り囲むように配置されていた。床を見れば様々な表情をした木彫りの人形が幾つも置いてあり、そして壁には様々な地球上にはいない動物の剥製、瘴気きようきのような黒いもやが憑ついている装飾具、果てには武器や拷問具のようなものが、吊るされていたり、立て掛けられていたりしていた。

他の物とはかく拷問具は何の儀式に使うんだ？ あとこの黒い瘴気はなんだろう？

俺はなんとなく近くの壁にあった瘴気きようきが憑ついている、天使のデザインデザインのネックレスを持って調べる。

黒いもやが不気味だけどかなり綺麗だなー。銀細工だろうか。天使のデザインデザインもかなり可愛い。後でミナに頼たのんだらくれるかな？

俺はじつとネックレスの天使を見つめる。すると――

ケラケラケラケラケラ

あ、笑った。

「……………うぎゃあああああああああああ！」

思わずネックレスを力いっぱい投げ捨て、ミナに抱きついた。俺は顔を子供の様にミナの胸に埋めたまま、ふるえる指先で先ほどのネックレスを指さす。

「し、ししゃべ、しゃべったたたた、」

「はいはい、恐くないですから」

ミナは俺の背中をポンポンと叩き、頭を優しく撫でながら話す。

「駄目ですよ勇者様。瘴気の憑いた物に不用意にちかずいちゃ、呪われますよ？」

「ひいひい！？」

「あつ」

急いで俺はミナから離れ、置物が少ない扉の所まで避難する。瘴気恐いよ瘴気。後ミナから離れた時、ミナが悲しげな声を出したのは少し気になった。

しばらくして落ち着い俺は、周りを見渡しながら考える。

うわー、どれもこれも俺に使われるかもしれないと考えるとぞつとする。だがせめて拷問具と瘴気が憑いているのじゃ無いで欲しい、特にあのネックレス。ただ儀式というだけでも不気味なのに、こんな物を使う儀式なんて少し想像するだけでも気分が悪くなる。だれど石を埋め込むと言ってたし、どうせそんな物騒な物は使われないだろう。いや、でもまさかという事もあるよな。はつきり言ってあ

りえないが、物理的にありえないが、天文学的にもありえないが、どちらかを使う覚悟は決めておいた方が良さな。よっし、拷問具でも瘴気でもどちらでも来いやっ！

「この部屋にはいろんな物が置いて有るけど、俺の儀式にはどれを使うんだ？」

するとミナは、燭台の温かな光を受けているその金色の髪をマントの様に翻して振り向き、月の光の下で舞う妖精を思わせる様な、明るく柔らかな笑顔を俺に見せた。

その瞬間、俺の心臓がバクバクと耳に聞こえるほど激しく鼓動を始める。何なのだろう。この明るさをいっばいに湛えた笑顔を見ていると何か不思議な気持ちが入み上げてくる。俺は一つの確信めいた予感がした。そうか、だからこんなにも俺は胸がときめいているのだろう。

そう

嫌な予感が。

「全部使います」

ちくしょおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おお！！

第六話

とある城に隠された儀式場。そこでは消える事のない黒い燭台の火によって、壁や床にある様々な禍々しい道具が薄暗く照らされており、おどろおどろしい瘴氣かかわを漂わせている。部屋中央には、長年放置されていたのにも拘らず、少しのほこりも被っていない真っ赤な魔法陣が描かれていた。そしてその不気味にゆっくりと、点滅しながら赤い弱い光を放つ魔法陣の前で、若い男と少女が揉めていた。

「勇者様。我が俤を言わないで下さい」

「怖いもんは恐いんだよつ。とにかく儀式はしない！」

「儀式をしませんと立派な勇者様になれませんよ」

「なら勇者になんかにならなくても良いっ」

「ほら勇者様、手を握っててあげますから我慢して下さいね。では儀式を始めますよ」

「いやだーーーーーーー！」

何だか好き嫌いをする子供と、その母親のようなやり取りになっているが、断じて俺は引かない。

だって拷問具や、あのネックレスのみたいに呪がかかっている物を使われるんだよ？ 嫌な想像しか浮かばない。そんな状況では少々子供のように駄々をこねたって良いはずだ。

ミナはため息をついた。

「しょうがありませんね」

指を鳴らすと、ミナの影から何か黒いものが勢い良く伸びて俺に絡みつき、体をグルグル巻きにする。

「うぎゃっ」

バランスを崩した俺は正面から倒れ、顔面を強打する。やべ、鼻血出てきた。

「ああ！ すみません、大丈夫ですか！？」

ミナは慌ててハンカチを取り出し俺の鼻血を拭き取る。

気遣いは嬉しいが、だったらもう少し考えて魔法を使ってほしい。恐くは無かったが、急に体を縛られて良い気をするのは真性のMだけだ。とは言ってもいきなりの事で多少はビックリしたが、あのネツクレスの恐怖に比べれば恐くもなんともない。はっきり言ってもやろう。こんな物を恐がるような奴はヘタレだ。

まあ、す巻きの状態の奴が言うセリフじゃ無いかもしれないけどな。

しっかしまー、どっかで見たように感じるのは気のせいかな？ 何だか力が抜けてきたし、よくよく見ると手の形をしている。

「つて、手え！？」

そう、それは手の形をしていた。真っ黒な手でしかも触れている所から力が抜けていく、間違いない。

「ぎゃーーーーーー！！ 出たーーーーー！！」

くそっ追ってきたんだ！ 今度こそ殺される。嫌だ嫌だ怖い怖い！
また液体の地面に放り込まれて溺れ死ぬ。どうしようどうしよう。ミナの魔法で出てきた黒い手に殺さってあれ？

ミナの魔法？

「ミナ。これはどういう事だ？」

「これなら私の魔法ですけど」

「いや、そうじゃなくて俺が召喚される前にこれに追いかけられたんだけど。とにかく軽いトラウマになっているから放してくれ」

「あー、実は召喚魔法を使った時に誤作動が起きてしまいました、魔法陣が勇者様の足元では無い全く別の場所に出てしまい、解決策としてこの魔法を使い、勇者様をこの世界に招待しました」

ほお、どうやらこの世界では誘拐の事を招待って言っらしい。

俺の世界では神隠しとか犯罪って言っんだよ！

「でもどうやって俺を認識したんだ？ この黒い手を使っても姿が見えなければ逃げた時に追いかけれないと思うんだけど。もしかして自動で追いかける魔法なのか？ あと、恐いから早く放してくれ。」

「えーと、説明するよりも見せた方が早いのでちょっとこの手の平を見て下さい」

ミナがそう言うと、黒い手の一本が俺の顔に触れるか触れないかというギリギリまで近ずいた。俺は言われたとうりに黒い手の平をじっと凝視する。

周りが暗くて良く分からないが、よく見てみると手の平に一本

の筋が入っているのが見えるな。

「おい、これがいい——」

辛抱できなくなつてミナに尋ねようとした瞬間。

——巨大な眼球が目の前に現れた。

「——————っ!!」

よしっ、良く耐えた。良く叫ばなかったぞ俺！ 偉いぞっ!!

「その手の平に付いている目玉と視覚を共有して勇者様を見つける事が出来ました。ですけど作り物の目ですから視界が悪く、ぼんやりとしか分かりませんでしたけどね」

「説明は良いから、早くその気色悪い目玉の手をどかしてくれ。本気で恐い。そして言うのが三回目だけど放してくれ」

「気色悪いなんて酷いですよ。私が一番好きな魔法なんですから」

手の平の目玉は閉じてミナの元まで戻り、ミナはその手をよしよしと撫でる。

そんな事はどうでもいいから放してくれ！

「ミナさんミナさん、なんで放してくれないんだ？」

「だって放すと逃げちゃうじゃないですか。儀式はしっかり受けて貰いますよ」

くっ、否定できないのが悔しい。

「そもそも、何でそんなに恐がるんですか。普通の儀式をするだけですよ?」

本当に不思議そうにするミナ。

そんな様子につい怒鳴りつけそうになったが何とか抑える。未だにキョトンとしているミナにイライラしながらも「あのな、儀式自体が普通じゃないだろ」とか「それに拷問されたり呪われたりするのはいくなくやつがいるか?」とか「この部屋の道具を全部なんて魔王を封印する前に俺が死ぬだろ」とか、精一杯早口で説明した。

それを聞くと「あー、そう勘違いしたんでしたか」と納得した様子にうんうんとミナは一人頷く。

勘違い?

「別にこの部屋にある道具を勇者様に使うなんて言っていないですよ。儀式に使うと言ったんです」

「言っている意味がよく分からないんだけど」

「この儀式を行うには莫大な魔力が必要なのですが、残念ながら私はそこまでの魔力を保有していません。ですから拷問具や先ほどのネックレスなどに籠こもっている瘴気や感情を、人形や魔物の剥製で作った装置で魔力に変換して足りない魔力を補います。なので別に勇者様に直接使用う訳ではありません」

「とにかくそれを聞いて安心した。じゃあ儀式を始めても良いけど俺はどうすりゃ良い」

「勇者様は魔法陣の上に行くだけで良いです。後は私に任せて下さい」

もう俺が逃げないと分かったみたいで、黒い手がミナの影に沈み、

溶けて、消えて行つた。

束縛から解放された俺は魔法陣の元へ歩いて行く。

だが一歩手前で立ち止まってしまった。情けないが、目の前にして元の世界で溺れる事になった魔法陣への恐怖が、急激に襲いかかったからだ。ゆっくりと大きく息を吐き、過去の記憶を睨みつける。
トラウマ

確かにあれには酷い目に会わされた。直ぐに意識を失つたため、窒息する苦しみを味あわずに済んだが、恐かつたのは変わらない。だが、この魔法陣とあの魔法陣は別の物だ。一度酷い目に会つたからと言って直ぐに物事を避けていると、これから先俺は何の進歩も出来ないままになるだろう。もう迷わない。

今こそ過去と決別するために、俺は大きく一步をふみだ「ごぶつ！？」

大きな音と共にキラキラと光る大量の飛沫を幻想的に飛び散らせ、俺は魔法陣に落ちた。飛び散った飛沫は、何故か周りに落ちるとすつと消える。

—— ああ、結局溺れるのかよ。

足を魔法陣に乗つけようとしたのだが、前と同じく液体になっており、そのままダイブする形になった。この世界の魔法陣は皆液体なのか！？

俺はゆっくりと液体の中を深く、さらに深くと沈んでゆく。そして奇妙な事に、息が出来ていないにもかかわらず全く苦しく無い、それどころか満たされたような充足感がある。

ん？ 何か聞こえてきた。

歌の様な、詩の様な、意味のある言葉か、ただの音の羅列か、良
く分からない声が上がから降ってきて頭の中を回り巡る。意識がだん
だんと遠くなつてゆく。ゆっくりと沈む感覚が全身を包み込み……
……完全に意識を失った。

第六話（後書き）

冬休みが終わったので、更新スピードが遅くなると思います。

第七話

心地好い……………。

何時からそうしていたのだろうか……気がつくと、誰かに柔らかな手で優しく髪を梳く様に、頭を撫でられていた。

あと後ろ頭に何か柔らかい物が当たっている。何だろう？ まあいいや。

俺は目を瞑ったまま、ぼんやりと取り留めも無く考える。

日に当たっているのか体がポカポカして気持ち良い。眠気が俺を再び睡眠へおいでおいでと手招きする。本当にまた眠ってしまったのか……そうだ、そうしよう。起きて、この気持ち良いまどろみを振り消すなんてもつたいたい。召喚されてから色々ときつかったからなあ。溜まった疲れが、徐々に癒える心地よさに身を任せ、俺は深く眠りに……………。召喚？

眠気で思考の定まっていない俺の脳に、召喚されてからの煩わしい記憶が着々と戻ってくる。何も考えず心安らかに眠りたい今の俺としては、邪魔にしかない。

歯を食いしばり目をギュッと瞑って、脳から楽しくも無い記憶を追いつ追いつと試みた。

結果、眠気が晴れただけ。完全に逆効果だった。記憶も完全に定着してしまっただけ、意識がはっきりとした状態の今、再びまどろむ

のを待つてまで寝る気にはどうもならない。

あゝもう。起きればいいんだろ。起きれば。

先ほどは頭が回転していなくて状況が良く分からなかったが、大方ミナが俺を膝枕でもして、頭を撫でているのだろ。近くにいるのなら丁度良い。今すぐにも先ほど魔法陣に溺れた事について文句を言わなければ。大体、高校生にもなって溺れるとか恥ずかしいだろ？一言だけでも注意してくれば良かったのに。しかもこれで溺れるの二回目だぞ二回！ミナは俺の黒歴史を増やしたいのか！？

考えれば考えるほど腹が立つてくる。

猿でも学習能力が有るのに、お前はそれ以下の行動しかできないのか？という疑問も有るだろう。一回溺れた上にその恐怖を一手前で思いだしたにも関わらず、同じ様に液体という可能性も考えないで、ばかみたいに魔法陣に踏み込んだ方が悪いという意見もあるだろう。

知るか！

「おい、ミナ！魔法陣があんなプールみたいになっているなんて聞いて無いぞ！？」

ガバツと身を起こして怒鳴りつける。が、

「あれ？」

確かにミナは膝枕で俺を寝かせて頭を撫でていたはず。ならば俺

が寝ていた場所にミナがいるはずなのだが、そこには誰もいなかった。

なら膝枕をしていたのは誰？

分からなければ考える。俺は腕を組み、顔を斜め下に向けて考え込む姿勢を取る。そして顔を向けた方向には、二本の黒い手が丁度寝ていた時に頭を乗っけていた場所に折り重なっていた。二つの手の平にそれぞれ付いている充血した目玉が、瞬きもせずにジッとこちらを見ってくる。

余りにもシニールでホラーな光景に、顔が引きつった。

おそらくミナの魔法で出てきた物だから、襲われる事はまず無いと思う。だが万が一の事を考え、刺激しないようにゆっくりと一歩一歩後ずさり距離を取っていく。

もし何かに躓いて転んだら、その音に反応して飛び掛かってくるかもしれない。念には念を、俺は足元を見る。

俺の右脚に黒い手が巻き付いていた。

「……」

これこそ灯台下暗し。今まで全く気が付かなかったが、黒い手が蛇の様に巻きつき、例のごとく俺をガン見していた。蛇に睨まれた蛙の様に固まる俺の体を、するすると巻き付きながら登っていき、てっぺんまで来るとワシャワシャと頭を撫で始める。

だれかつ、これを何とかしてくれっ！

俺の念が届いたのか背後のドアが開く。

「勇者様」

地獄に仏とはこの事を言うのだろう。ミナがドアを開けて俺の元に歩いて来る。

「ミナっ、この手を消してくれ！」

「え？ どうしたんですか急に」

「いいから早く！」

「はっはい、分かりました。消え去れッ！」

儀式場の時と違い、ミナは大きく腕を横に振るう。すると黒い手がバシユツと大きな音を立てて、風船の様に弾け飛んだ。「ぎゃあっ！……俺を巻き沿いにして。」

「勇者さまっ！？」

ミナが慌てて駆け寄る。

「いや大丈夫だ。だけどいきなり爆発させる事はないだろ？」

「すみませんでした」

叱られた犬の様なしゅんとした表情になり、顔をうつ向けて、涙声で謝罪する。

「いや別に怒ってるわけじゃ無い。まあ悪気は無かったんだし、黒い手の腕枕も寝心地は悪くなかったしな。で、儀式は成功したのか？」

このまま泣かれても困るからな。適当に慰めて話を逸らした。

「あつ、大丈夫ですよ。封印の石は無事に勇者様の体の中に埋め込まれました。後は魔王の元まで行って封印するだけです」

ミナは先程までの暗い雰囲気から一変して、明るくはきはきと説明をする。切り替え早っ！

「で、その魔王を封印するのはどの位難しいんだ？　魔王の強さと封印の方法を教えてください」

いくら封印する力を使えたって封印する前に瞬殺されたら意味がない、余りにも難しそうだったら辞退しよう。ミナが今度こそ泣いてしまうかもしれないし勇者の地位は名残惜しいが、どんな条件だろうと命には代えられない。

「封印の方法は相手に向かって手をかざすだけです。魔王の強さは分かっていますけど、勇者様には余り関係有りませんよ。なぜなら封印の力は持っているだけで、封印の対象になる物に対して絶対的な強さを手に入れますから。その状態なら多分、小指一本で魔王を吹き飛ばせますよ。ただあくまでも封印の対象に対してなので、魔王以外には全く効きませんけどね」

それって封印する必要があるのか？

「それなら封印なんかしなくても普通に魔王を倒せば良いんじゃないか？」

「そうしたいのは山々ですが魔王は不死なのでどんな重傷を与えても倒せません。よって必然的に封印しか方法が無いのです。まだ何

かありますか？」

「どうやって魔王の所まで行くんだ？」

良くあるゲームのように、魔王の城まで野宿をしながら、時には魔物と戦って長い道のりを旅をするなんて御免だ。

「魔王の所までは三年前に準備しておいた転移魔法と、結界を使います。まず転移魔法で魔王の所まで送り、結界で魔王以外の魔物を勇者様に手出し出来ないようにして、勇者様は魔王を封印するといふ算段です。質問は？」

「帰る時はどうすればいいんだ？」

「同じく準備しておいた転移魔法の術式を、封印する石に込めておきました。魔王を封印した時に発動するようになっています」

「わかった」

「じゃあ、さっそく転移魔法の儀式場に行きますよ」

ミナは俺の手を握って歩き始める。

俺は慣れたからか、慌てて転びそうになると言っ事は無く、ミナに引かれるまま歩きだした。

第七話（後書き）

なんかスランプ気味……

次回はいよいよ魔王の元へ行く予定です！

第八話（前書き）

すみません、今回はいつにも増して文章が酷いです。
たぶん再編集すると思うのでご理解を……。

第八話

さて、長い廊下をミナの進む通りについて来て、一つの部屋に着いた訳だが。

「なあミナ、俺達は儀式場に行くんじゃないっけ？」

そう、俺の記憶が正しければ、確か魔王の元にたどり着くために儀式場に向かったはずだ。だが実際に着いた部屋は、儀式場と言うには余りにも明るく、華やかで、楽しげだった。

この広い部屋にあるクロスのかかった幾つものテーブルには、こんがりと焼け、今もジュージューと音を立てているローストチキン、蜂蜜が垂れてきそうな程たっぷり塗られたフルーツケーキ、鮮やかな色のジュースとカクテル等、食欲をそそるたくさんの御馳走が置かれていた。俺は思わず唾を飲み込む。

壁を見ると色紙で作ったリングを繋ぎ合せ、チェーン状したものがかかっており、部屋のあちらこちらにある楽器は、演奏者の存在を忘れたかのように勝手に動き、明るい曲を鳴らしていた。

どこからどう見てもパーティ会場にしか見えない。

「ええ、ですからこの儀式場に来ましたよ？」

「と言うと、この立食パーティ会場みたいなこの部屋が、儀式場ってこと？」

「そうなります」

「じゃあ、なんで封印の石を俺に埋め込んだ儀式場とこんなに雰囲気が違うんだ？」

あの禍々しい場所とこのパーティ会場を、同じ様に儀式場とひとくくりの名前で呼んではいけない気がする。

「儀式場と言っても色々と規模が有りますからね。転移魔法は使用できるまで時間がかかりますが、発動する儀式場はコンパクトな魔法陣だけで十分なんです。これを見て下さい。これに描かれている模様が魔法陣です」

ミナが手を向ける方向には巨大な大砲があつた。魔法陣らしき幾何学模様がデザインされたカラフルな砲身は、サーカスの人間大砲に良く似ている。部屋の隅に置かれていたから気付かなかつたが、かなり派手で目立つ。

「なんでわざわざあんなところに魔法陣を描いたんだ？」

普通、床や壁に描くものじゃないのか？ いや、別に良く知らないしただのイメージだけど……

「せっかく勇者様が魔王を倒しに行くのですから、出来るだけ派手でカッコよく出発させようと思ひまして、勇者様が大砲に入り、私が作動させると転移される仕組みにしてみました」

「ああそうなんだ。ありがとう」

カッコいいか？

大砲に打ち上げられ大空へと旅立つ姿を想像してみた。何回イメージしても俺が赤鼻を付けて赤と白の服を着ている姿が思い浮かぶ。

……うん、派手なのは認める。きっと子供達が見ていたら、思い出

に残るエンターテイメントを提供できるだろう。それにしてもまさか本当に人間大砲だったとは……

「この部屋にある料理や楽器等も儀式には関係は無く、勇者様の出発を祝う為に用意しました」

「俺とミナしかいないのか？ 二人だけで祝うのはかなり物悲しいと思うんだけど」

「あとお父様とお母様も来ますよ。今は勇者様が魔王を倒しに行く事を全国民にスピーチしています。もうそろそろ終わってここに来ても良い頃なんですが……」

後ろのドアが開く。そこには食堂で一緒に食事をしたミナの両親がいた。

「お父様、お母様っ！」

ぱつと顔を明るくし、走り出して両親に抱きつく。

「ミナ、いつもならまだしも今はミナの婿になる勇者がいるんだぞ、はしたないから止めなさい」

ミナのお父さんはミナの頭を撫でながらミナを叱った。だが全く怒気がこもっておらず、自分の娘を愛おしそうな目で見ているのを見ると、本気で怒っている訳では無いようだ。

「あら良いじゃないの、ダムルだってミナに甘えられるのは嫌いじゃないんですよ？」

「しかしサーナ、勇者に失礼じゃないか」

「勇者クンも私達の家族になって他人じゃ無くなるんですから、いつもどおり振舞っても何の問題無いもないわよ。ねえ勇者クン？」

「はっはい」

サーナさんはふふ、と笑った。

「ミナったらホントに甘えん坊さんなのよ。ついさっきまで私とダムルが一緒じゃなかったら寝れなかったんだから」

「お母様一体何年前の話ですか、もう一人で眠れますよ」

ミナは拗ねたように言う。

「そうね、これからは勇者クンと寝るから寂しく無いわよね。可愛い孫を見れるのも近いかしら」

「お母様っ！」

ミナが茹でたタコのように顔を真っ赤にして怒ったが、当のサーナさんはニコニコと面白そうにミナを見ている。ぜんぜん堪えてないな。

「サーナ、ミナを余りからかうんじゃない、ミナも女の子が大きく口を開けて怒鳴るもんじゃないぞ」

「はいはい、わかりました」

「お父様、すみません」

ミナはハツとして素直に頭を下げたが、サーナさんは相変わらず笑顔のままだ。頭を下げる気は無いらしい。

何か見えていて微笑ましいな。

「仲が良いんだな」

「はいっ、だってお父様もお母様も私の一番大切な家族なんですか」

ら！」

さっきまでその家族と喧嘩をしていた様には見えない程、純粹で綺麗な笑顔になる。その透き通った表情には、混じりけのない家族への愛情が有り、それを見ただけで、今の言葉は嘘なんか全く無い本心から来たもの何だと分かった。

「勇者様ですよ」

ミナは俺の右腕に抱きつく。

「えっ？」

「魔王を倒して来ましたら私たちは結婚して、お母様も言った通り家族になるんですから」

「あ、ああそうだな」

そうだった、魔王を倒してきたらミナとの結婚。知り合ってたまだ一日しか経っていないのに結ばれるのは……別に嫌じゃ無い。ぶっちゃけ、ずっと独身のままだと思っていた身としては棚から牡丹餅だ。

だけど全く現実感が無いのは何故だろう。いや、嫁^{ミナ}さんの両親の名前もたった今知ったばかりなのに、現実感も糞も無いか。

召喚されて魔王を倒しに行ってお姫様と結婚。今でも単純なRPGの設定としか思えない。多分元の世界には二度と帰れないだろう。俺の家族にももう会えない。その代わりに今日知り会った他人が俺の家族のポジションに居座る。まあ、抵抗感も最初だけだ。きつと結婚してしばらくすればそれが普通になるだろう。

「ミナ」

「はい、なんですか？」

「質問がある。これを聞くのは三回目だが真剣に答えてくれ。俺の事を愛してくれるか？」

答えは分かっている。けどもう一回だけ聞きたかったんだ。

するとミナは当たり前前の様に答えた。

「いつまでも愛しますよ。私のカッコいい勇者様」

やっぱりな。けど実際に聞いたことで少しは現実味が出てきた。イメージしろ。俺はミナの婚約者だ。ミナのカッコいい勇者様だ。そうカッコいい……………あ。

「あああああああああ！」

俺は両手で頭を挟んでしゃがみ込む。

重要な事を忘れてた……………そうだよ、何を勘違いしてんだよ俺。

「どうしました！？」

「大丈夫かね！？」

「どうしましたの！？」

ミナ達は、俺がいきなり奇声をあげた事に驚いて俺を心配する。

俺は立ち上がってミナに向き直る。

「ミナ、前に能力の残片の話をしたよな？」

「？　しましたけど」

「実はその残片が残っているみたいなんだ。」

「本当ですか！？　で、体への変化は？」

「その事なんだけど……」

「どうしたんですか？」

俺がカッコいいのは能力の残片の副作用によるものだっただろ？
整形手術と同じ偽物の美。ミナも俺の顔に一目惚れをしたはずだ。
だけど真の姿は醜いブサメン。本当の事を話したら結婚を断られる
かもしれない。だけど、本当の自分を隠して結ばれるのは結婚とは
言わない筈だ。

「見た目が変わったんだ」

「見た目？」

「そう。ミナは俺の顔を見て好きになったんだよな？　だけどそれは残片によるもので、本当の姿はこんなにカッコ良くないんだよ。
失望させて悪かった。俺も嫌がる人と無理やり結婚はしたくない。
だから結婚を断っても……」

「別に良いですよ？」

さっきと同じように当たり前のように話す。

「本当にか？　カッコ良くないどころか、かなりの不細工だぞ？」

「どんなに醜くとも全く問題有りませんよ。確かに一目惚れをした
と言うのは本当です。ですけど勇者様が勇者様で有る事は変わら無い
じゃないですか。」

「——っ！」

俺は驚きと共に今までの自分の愚かしさを痛感した。自分を愛してく
れる人など現れる筈がないと、顔のせいで今まで俺は勝手にそ

う考えていた。それが見た目なんて関係無く愛してくれる相手にと
って、どんなに失礼な事なのかも考えずに……。

「なんかスマン。くだらない事を聞いたみたいだな……。じゃあも
う行くけどこの大砲の筒に入れば良いんだよね？」

「あっ！ その前に、えいつ！」
「いてっ！」

ミナは俺の髪を何本か引き抜き、いつの間にか持っていた小瓶に
その髪の毛を入れる。

「いきなりなんだよ？」

「勇者様の能力が何か調べる為に体の一部がだったの。魔王を倒
しに言っている間に何の能力か調べておきますので、楽しみにして
おいて下さいね。あと――」

「まだなにかむぐう!？」

「む……ちゅぷ……ん、ん……む……ちゅ、」

急に俺の顔を両手で引き寄せてキスをし始めた。

「……………ぶはあっ!! 何なんだよいきなり」

「何ってお出かけのキスをしたんですが」

「あのさあ、しつこいように悪いけど俺はカッコ良くないぞ？」

「だからどんな姿でも問題有りませんってば。それにどんなに謙遜
なさっても事実が変わりませんからね」

「それってどういう意味だ？」

「さあ？ じゃ、行つてらっしゃーい」

「うおっ!？」

ミナの影からたくさんの黒い手が伸びて次々と俺に巻き付き、持

ち上げて大砲に投げ入れた。

おい、何かごまかそうとしてるんじゃないか？

「おい、ちゃんと質問につてうわあつ！」

俺がミナにもう一度問いかけようとしたが、それは驚きの声へと変わった。なぜなら突然失明しそうな程の眩い閃光が起こり体を包み込んだからだ。

「くそつ、まだ聞いてないのに！」

次の瞬間には、俺の体は大砲の中から消え去っていた。

第八話（後書き）

はい、確かに魔王の元へ行きましたね。

行っただけで会っていませんけど……。

すみません！！ 次回は本当に魔王に会いますので！

第九話（前書き）

また文章が酷くなっていました。すみません。
多分再編集をします。

第九話

「あーくそつ、何故こうなった。本当にいてえ……視力落ちて無いかな？」

今現在、俺は玉座に座り、目を閉じたまま片手で頭を押さえ、酷く鳴り響く頭痛と戦っている。二日酔いってこんな感じなのだろうか？　なら一生酒なんて飲まねえ。

俺はミナの転移魔法によって光に包み込まれ、魔王の元へ送られたのだ。光に包み込まれると聞くと戦隊ヒーローや、魔法小女の変身シーンが思い浮かぶ。だが残念ながらそんな素敵なもんじゃない。一種の拷問と言っても良いだろう。何故か目を閉じてても両手で目を覆っても全く眩しさが変わらず、強い光を見続けたせいでどんどん頭が痛くなっていき、さらには失明するんじゃないかという恐怖が襲いかかるのだ。今思い出しても恐ろしい……。

大分頭痛も楽になってきたので座ったまま周りを観察する。

壁や地面、そして天井までも全て岩に覆われている。多分何処かの洞窟だろう。壁には火のついた松明が等間隔で設置しており、暗い洞窟内を照らしている。俺のいる場所はかなり広いホールになっており、その丁度中心にポツンと俺が座っている玉座が有る。包み込んでいた光が無くなり、気付いたら座っていたのだ。おそらくこの椅子の上に転移させられたのだろう。

で、魔王は何処だ？

魔王を見つげようと、再び座ったまま周りを観察する。

結果、居ない。

確かにこの洞窟は薄暗いけど、壁にある松明のお陰で見えない場所はない。その上、視界を遮る障害物も無いのでぐるりと見渡すだけで隅から隅まで見る事が出来る。しかも見渡した時に気付いたのだが、この洞窟には出入り口が無かった。ここから魔王の場所まで歩いて行くという訳でも無いようだ。

とすると、魔王が来るまでこの玉座に座って待つているというところか？ いやいや、それじゃあ魔王と勇者の立場が逆じゃねーか。

あとはこの玉座に何か仕掛けでも有るとか？ まさか玉座の下に階段が……

そんな単純な仕掛けで有る筈が無いと思いながらも、俺は玉座から降「ぷはっ！！」り……？

「はあっ！ はあっ！ 酷いですよ。はあっ、いきなり私の上に座るんですから。すはあっ、息が出来なかったじゃないですかケホッ」

「あつご、ごめん！」

俺が腰を退けた王座に居たのは、紫陽花の柄が入った赤い和服を着ている童女だった。だがその服には帯が無く、大きくはだけている上に下着を着ていなかったで、隠さなければいけない所も隠されて無かった。これでは殆ど裸と変わらない。しかもその幼い身体は息が乱れて肌がほんのりと赤く上気しており、なんか物凄くエロい。だから俺はこの子の荒い呼吸によって上下に動く胸や、毛が一本も生えていない滑らかな肢体に、ついつい目を向けてしまうのも

仕方のない事だろう。多分。

「はー、はー、ふうう」

息が整った彼女は玉座から立ち上がり、はだけた服を着直して整えた。

さつきは服がはだけていたので気が付かなかったが、明らかに服のサイズが大きい。腕は完全に袖に埋まっており、それでも袖の半分がだらりと垂れ下がっている。小さな体でダボダボの服を着ている姿は愛くるしく俺の保護欲を刺激した。

「ねえ、ちよつと良いかな？」

「何ですか？」

裾をズリズリと引きずりながら目の前まで歩いて来たこの子に、しゃがみ込んで出来るだけ優しく問いかける。

とにかくこの子が、魔王の居場所を知っているのかもしれない。

「聞きたいんだけど、魔王って何処にいるか知らない？ 今から倒しに行かなきゃいけないんだけど」

「えっ！ という事は勇者なんですか？」

目をキラキラ輝かせながら聞いてくる。

可愛いな。勇者に憧れる女の子ってところか。俺は期待に答える為、カッコいい笑顔で質問に答える。

「そうだよ、世界を救うため魔王を倒しに……へ？」

何かが銀の光の尾を引いて、俺の顔のすぐ横を通り過ぎた。

恐る恐る後ろを見るとナイフが岩に突き刺さっていた。

「あつ惜しい！ 今度こそつと」

女の子はダボダボの服に片手を突っ込むと、岩に突き刺さっているナイフと全く同じ物を取りだした。

「えーと、何をしているのかな？」

「？ 何って、本当に勇者かどうかの実験をしているんですよ」

女の子は先ほどと全く変わらないキラキラとした目で俺を見る。

「はあ!？」

「だって本当に勇者なら封印の力で魔王によって殺されない筈ですよ？ だからこう」

「こう?」

「掻き切るんですよ!」

女の子は俺に飛びかかり鋭く光るナイフを振り上げると、赤い血をたっぷり脳へ送っている、俺の喉に向けて振りおろした。

殺されるっ!？

「うわあああああああ!……あ………あれ?」

次の瞬間に感じたのは、ナイフによって喉の肉を抉られ切断される痛みでも、喉から噴き出す自分の血の温かさでも無かった。ある

のは喉に小さい手が柔らかく触れる感触のみ。

見てみると女の子が握っていたナイフは粉々になって地面に散らばり、何も持っていない手が俺の喉にぶつかっていた。

「い、生きてる、生きてるんだ、あはは、あはははは、生きてる、」
「やっぱり勇者だったんですね！ あっ！ 自己紹介がまだでしたね私が魔王です。宜しくお願いします。ほんとーに待っていましたよ。実は勇者であるあなたと取引が有るんです。聞いてもらえますか？」

さて、俺が生きている素晴らしさを実感している時にしゃあしゃあと話しかけてくるこの糞ガキ、どう料理してやろうか。ああ、そう言えばこいつ魔王なんだよな？ それなら……

「貴方は勇者としてこの世界に召喚されましたよね実は」

はい！ おゝきく右腕を引いてゝ

「って事なんですですからその事に関しては」

拳を思いつきり握りゝ

「でも安心して下さい。そうならないように私は」

こいつの顔面をゝ

「ですからこの取引に応じてくれれば」

——ぶん殴るっ！！

「で、どうしまぶべらっ！！！」

俺の拳がぶつかった瞬間、ゴツと普通殴った位では起きない音が響く。

魔王はそのまま岩を直線状に削って行きながらぶっ飛んで行き、岩の壁に衝突した。

洞窟が崩れるかと思う程の轟音と振動。もうもつと土煙が立ち上がる。

土煙が晴れると巨大なクレーターが壁に出来ていた。

「……」

かなりやり過ぎた。小指一本で吹き飛ぶとは聞いたけど、ここまでは。

といっても不死だと言っていたしどうせ平然としているはずだ。

するとクレーターの中心が崩れて誰かが出てくる。

まあ、後で封印するとはいえ、一応謝っておくか。

「いやゝ、やりすぎた。ごめん」

「本当ですよ。不死と言っても痛覚はちゃんと有るんですから」
「ごめんって。ん？」

こちらへ這いずって来る何か。

それは人の原型を留めていなかった。焼けただれた肉、だらりと剥がれている皮膚、片方の目は飛び出て神経のようなもので繋がっていた。頭は岩が突き刺さって陥没しており、頭蓋骨が見え、ピンク色の物体がはみ出している。そして怪我をしている全ての部分が、ぐじゅぐじゅとまるで別々の生き物の様に蠢めくいていた。

「いえ、全然反省してないじゃないですか、そんなんじや許しませんよ」

恐怖で動けなくなった俺の体を掴んでグググっと起き上がり、顔の様な部分を俺の顔に近づける。

「ほら、ちゃんと謝って下さい」

ぼろつと腹の肉が崩れ落ちて、はらわたが俺の足に降り注いだ。

「ぎゃ ああ ああああ ああ ああああ ああ あごめんなさい いいいい
いいいい い——！——！」

第九話（後書き）

このままじゃちょっとキツイので、
更新を週に2回に変えさして貰います。

第十話（前書き）

今回は話を進めるだけなので、色々地の文とかが少ないです

第十話

限りなく真つ暗な空間に俺はいた。

そこは上も、下も、左右も、前後も、何処までも何処までも光は無く、ただ永遠の闇が有るだけである。

「……」

いや、別に異次元に飛ばされたという訳では無い。ただ単に目を閉じて眠っているから暗いだけだ。

あゝ、それにしてもまた寝てたのか。どうも今日は気絶する事が多いな。一回目と二回目は魔法陣に溺れ、確か三回目は……今回だっけ？

なんだ、いがいと少ないな。両手どころか、片手で数えられる程度じゃないか。何か俺の被害妄想が激しくなってるのかな？

……………ん？

いやいやいや、全然少なくないじゃない。普通一回気絶する事だけでも十分おかしいって。何？ 両手どころか片手で数えられる程度？ 十回も気絶してたまるか！

ヤバいな、完全に感覚が狂ってる。それもこれも全部悪いのはあの二つの魔法陣と、えゝと……その……………。

今回は何で気絶したっけ？

うっん、封印の力によって、喉を切り裂こうとした魔王のナイフをバラバラにした所までは覚えていたけど。どうしてもこれ以上は脳が拒否しているみたいで、全く思いだせない。

いや待て。ただ単にナイフという危機を脱した事で気が抜けてしまい、そのまま気絶してしまっただけじゃないか？ それだったらそこからの記憶が全く無いのもつじつまが合う。

とにかくこのまま寝ていてもらちが明かない。目が覚めればどうせ全て思い出すだろう。

俺は目を開ける。

視界いっぱい、紫の髪と赤紫の瞳をした可愛い女の子の顔が映った。

「あっ！おはようございまーす」

幼さを感じさせるあどけない笑顔で俺に挨拶をする。

「あ、うん。おはよう」

いきなりの事に若干たじろいたが何とか返事を返す。

「えっと、もしかしてずっと俺の顔を覗き込んでたのか？」

「はい！ 心配しましたよー」

「は？ あのさあ、お前がナイフで襲ってそのせいで気絶したのに心配っておかしくないか？」

そう、こいつが俺を気絶させた張本人であり、俺が倒すべき存在である魔王だ。何が本当に勇者かどうかの実験だ。死んだらどうするっ！

あ、そういえば俺勇者だった。良く考えれば、魔王が勇者を殺そうとするのは当然だよな。

「何を言っているんです？ 勇者のあなたが勝手に私の顔を見て気絶したんじゃないですか」
「？」

顔を見て気絶？ そんな失礼な事をした覚えは……

『ほら、ちゃんと謝って下さい』

あ、思い出した。

「……」
「……？」

ふー、と息をつき、くるりと後ろを向いて構える。

位置についてー、よいい。

「いぎゃあああああゾンビイイイイイ！」

ラスボス
魔王を前に逃亡。

「誰がゾンビですか」

いつの間にか前に回り込んだ魔王は俺の足を引つ掛ける。

しまった！

普通ならばここで俺が転ぶはずなのだろう。俺もそう思ったが今回は違った。

ボキリ、足に伝わる何かが折れる嫌な感触。体中に走る嫌悪感に俺は足を止め、恐る恐る足元を見る。

関節じゃ無い所で魔王の脚が曲っていた。

「あー、そう言えば封印の力の事を忘れてました。それにしても痛みというのは、何回経験してもなれるもんじゃないですねー」

「え、えっと何か冷静だけど大丈夫なのか？」

大怪我をしているのにも拘らず、全く辛そうにしていない魔王に問いかける。

「大丈夫ですよ。ほら」

魔王の曲がった脚はぐじゅっぐじゅっと不快な音を立てながらゆっくりと真っ直ぐに戻っていく。

「うわ」

余りの気色悪さと不気味さに俺は思いつきり引く。

「よし、治りました」

結局十秒も経たずに元の綺麗な脚に戻っていた。

思わず俺はその脚を触ってみたが完全に治っている。傷の治った痕も無い。目の前で見たにも関わらず、俺は少し本当にさっき折った脚なのかと疑ってしまふ。

「えーと。じゃあ改めて聞きますけど取引には応じますか？」

ああ、そう言えばそんな事を言っていたな。ぜんぜん聞いていなかった。

「悪いけどもう一回最初から教えてくれないか？」

「いいですよ。えー、実はミナ姫が召喚するのはあなたじゃ無くて、別の人が召喚されるはずだったのです」

「どういうことだ？」

「あなたもミナ姫から聞いたはずですが、召喚する際には色々と呼び出すものの条件を決める事が出来るのです。その中には、勇者と取引をしたい私としては色々和不味い条件が入っていました。なのでここから魔法陣に妨害する魔法を使い、召喚の条件を消して、全く違う人物が勇者として召喚されるように細工をしたのです」

なるほど。ミナが言っていた誤作動ってのは魔王のせいだったのか

「でもミナは目玉の付いた黒い手を使って、俺を見つけたって言うていたんだけど」

魔王は、ああと言った。

「多分それはただの人違いだと思います」

「人違い？」

「あの目玉は視力は良くないって聞きましたよね？　ですから顔では判別が出来ないので、おそらく髪で判断したのでしょう。今までの勇者は全員黒い髪をしていたと、召喚に関する書物には書かれていますから。多分、勇者とか関係無しに髪の色は異世界にいる事を知らなかったんだと思います」

どうりで全く勇者らしくない俺が召喚されるわけだ。

「で、ここからが本題なんですけど私と契約しませんか？」

「契約？　どんな内容だ？」

「あなたが私の願いを叶えてくれると約束してくれるのならば、私はあなたの僕しもへとなり、あなたの能力を完全に開放して上げます」
「それだけか？」

能力はちよつと気になるが、たったその程度ならミナと結婚して、勇者の地位を手に入れて暮らす方が良い。裏切るのも嫌だしな。

「メリットはもう有りませんけど、断った場合のデメリットは有ります」

「なにっ!？」

俺は慌てて魔王から距離をとる。あれだよな。断ったらお前の命は無いとかそういうの。だが俺には魔王をゾンビみたいにしたこの封印の力が有る。負ける事はまず無いだろう。

「たぶん、このまま王国に帰ってもミナ姫と結婚出来ないどころか、下手したら国から追放されますよ」

「……」

ハッターか？

「さつき、ミナ姫の召喚の条件には、色々と都合の悪い条件が入っていたと言っていましたよね」

「ああ」

「その中には、【魔王を見つけたら話を聞かずにすぐに封印しようとする事】等の私にとって都合の悪い条件や、【魔王を倒した後、私と一緒に国の為にまじめに働いてくれる事】等の性格や行動に対する条件などが有りましたが、それらの条件の中でもっとも最優先されるようになっていく一つの条件が……」

「が？」

「【私好みのイケメンである事】でした」

「はあっ!?!」

え？ マジで？

第十一話（前書き）

今回は説明ばかりです。

第十一話

勇者とは何か。

強大な魔王を倒し、世界を救う者。どんな困難にも立ち向かう、勇気有る者。人々を助けようとする、心優しき者。様々な説があり、定義はハッキリしていない。もしかしたら、勇者はその人その人で誰の事を言うのかが変わる、曖昧な存在なのかもしれない。だがそれら全てに通じるのは、自身の憧れる、目標や光となる存在だという事だ。

俺は勇者として、この世界に召喚された。だけど魔王の話を知ると、俺は本当の勇者じゃ無く、間違いで召喚された偽物らしい。だから俺は、【魔王を見つけたら話を聞かずに直ぐに封印しようとする事】、【魔王を倒した後、私と一緒に国の為にまじめに働いてくれる事】などの様々な条件によって、選別された本物が持つ、甘言に動じない精神や国を支える能力などは全く無い。

確かに勇者には、様々な素質が必要な気がする。だからこそ、召喚される条件などが有るんだろうな。

さて、その条件をすっばかして勇者となった、そんな素質なんてこれっぽっちも無い俺は、どうすれば良いか。答えは簡単。召喚の条件を全て、クリア出来る様になれば良いだけだ。

それに逆に考えるとその条件さえクリア出来れば、勇者が務まると言う事でもある。明確なノルマだと考えた方が良くかもしれない。そして、勇者の選別の条件と言う事は勇者として生活する上で、結局は乗り越えねばならない事なのだろう。だからこそ、どんな条件

だとしても全てクリア出来るように頑張るしかない。

でもな？

「幾らなんでも【私好みのイケメンである事】は無いだろ……ん？
待てよ、と言う事は」

『それにどんなに謙遜けんそんなさっても事実は変わりませんからね』

「あああああああああああ！」

脳内にミナのセリフが鮮明に蘇った。

あの時と同じように、俺は両手で頭を挟んでしゃがみ込む。

あの意味深なセリフの意味ってそういうことか……イケメンしか
召喚されない様に設定したから、俺が本当に不細工だとは思わな
かったんだろうな。あの時の俺はミナからはさしずめ、自分のカッ
コ良さを自覚していないイケメンに見えたんだろう。

あ、そう言えばこんなのも……………

『勇者様が勇者様で有る事は変わら無いじゃないですか』

ちくしょおおおおおおおおおおお！ 騙しやがった
なあのかソ女！ くっそ、本当に外見とか関係なく、好きになっ
てくれたと思った俺が甘かった。ミナにも自分自身にも、物凄く腹
立たい。

荒立った気持ちを抑えようとスクつと立ち上がり、深呼吸をした。

いや、前向きに考えるんだ。俺の事をイケメンだと思っているのなら、好都合。黙っておけばばれる事も無い、このまま何も言わないでおいて美少女^{ミナ}をゲットしよう。俺は別に嘘なんて一つも付いてないからな。勝手にミナが勘違いして、俺に幻想を抱いただけ。

確かに俺はあの時、本当の自分を隠して結ばれるのは、結婚とは言わないと自分で言った。

だがもう構うもんか、あの時はミナがただ自分が良い性格に思われるように、平然と嘘を付く奴だとは知らなかったからな。落ち込んで、ミナが俺の体調が悪いのだと勘違いした時、メレム入りのミルクを飲ませてくれて、早く寝るようにと、本当に心配そうな顔で言ってくれたから優しい人なんだなと思った。だからこそ騙すような真似はしたくなかった。だが今はもう関係ない。

「あとミナ姫とキスとか色々したじゃないですか、ミナ姫は王族ですからね、あなたが不細工だとばれたら、それだけで罰が下る可能性が有りますよ」

一応ミナから俺にキスをしたんだから、俺は罰せられるっておかしいだろ。

「勇者は王族と同じ地位に有るって聞いたから、相手が王族だからってそんな理不尽な事はされないと思うぞ？」

「法的に勇者と認められるのは、魔王を倒して国王から勇者の権限を渡される時となっています。ですからまだあなたは正式な勇者じゃないんですよ。ミナ姫から聞いた通り、王族はあらゆる面で優

遇されるので、裁判で戦つても勝てませんよ。まあ、裁判が行われないまま追放されると思います」

マジかよ、でも余計な事を言わないで顔の事を隠し通せば何の問題も無いよな？

「そついやさつきから何で俺が召喚の条件や、王族の権限をミナから聞いたって事とか知っているんだ？ 隠れて盗み聞きでもしていたのか？」

「何つて、能力ですよ？ 大体あなたがこの世界に召喚された時ぐらいから、ずっと能力を使って何をしているかを見ていました。どんな能力かは契約するまではいえませんが」

ミナが言つた通り、魔王も俺と同じで能力を持っているのか。能力と魔法の違いってなんだろう？

「で、そう言えば本当に『私好みのイケメンである事』が条件に入っていたかどうかの証拠はあるのか？」

「一応召喚の魔法陣から、召喚条件の情報をコピーしてありますが、それを見て本物かどうかを判断できるだけの知識を持っています？」

「いやこの世界に来たばかりだから、全然分からない」

「じゃあ証明する事はできませんねー、後は私を信用して貰うしかありません」

「うーん、魔王を信用するのはなー」

ミナが言つた意味深なセリフとかも合わせて考えると本当っぽい、相手は魔王、もしかしたらそこらへんも計算して考えた作り話の可能性がある。見た目はただの童女にしか見えないけど……………

「何で信じてくれないんですか？」

「おいおい、だってお前は魔王だろ？」

一応俺、勇者だしな。魔王はいそうですかと信じるのは普通に無理だ。

「魔王だろって、なんか私の事を悪者みたいに思ってますか？」

「え？ 違うのか？」

「違いますよ。私は何も悪い事なんてしません」

魔王は不機嫌そうに言う。

たしかに魔王が悪ってのは偏見だったか。ミナが言った人間の敵ってのも間違った情報かもしれないし。

「じゃあ、お前の目的ってなんだ？」

「それはもちろん、王国を滅ぼす事です！」

魔王は明るい、無邪気な顔で俺に言った。

「……」

あーうん、分かった。お前は信用できない。

「どちらにせよ、俺が黙っていればれないんじゃないか？」

「それは無理ですよ。まずあなたは能力の解析の為に髪の毛を渡しましたよね？」

「そうだけど」

「あれは能力によって変化した体についても解析できるので、元がどんな姿だったのかも分かりますよ。それに解析に殆ど時間はかからないので多分もう終わっています」

「本当？」

ヤバいな、しょうが無いから一応結婚の事は諦めるか。魔王の嘘だという可能性が高いけど。

「まあ、結婚が出来なくても勇者の地位が手に入るならそれで良いや」

魔王に向かって右の拳を突き出す。後はこの手を開くだけで魔王を封印出来るはず。

「それじゃあこうしませんか？ 私を封印して王国に帰った時に、もしも追放とか罰を受けたら私と契約をして下さい。助けてあげます」

封印されそうなのにも関わらず、平然とした顔で魔王は言った。まあ、泣きじゃくられて命乞いをされるよりはよっぽど良い。

「いいのか？ そうじゃなかったら封印されたままになるけど？」
「一応ここにいる間、暇にまかせてミナ姫の事はずっと見ていました。なので、彼女のする行動は大体予想付きます」
「ふーん、じゃあ封印するぞ」

俺は握っていた拳を解放する。すると魔王が周りの空間ごと歪み始め、どんどん小さくなり、やがて黒い小さな球体となった。球体はふわふわとこちらに近づいてきて、俺の右の手の平に沈む。

これで封印は良いのか？

「あー、何とか成功しましたね」

俺の手の平から声が聞こえた。封印されても喋られんのかよ……

「おっ！」

急に周りが暗くなり始める。

今回も光に包まれると思って覚悟したが、今度は闇みたいだな。これなら失明する事も無いだろう。

どんどん周りは暗くなっていき、そして完全に何も見えなくなっ
った。

第十二話（前書き）

誤字脱字や、何かおかしい所があったら教えてくれると嬉しいです。

語呂を良くする為に、あらすじを少し変えました。

第十二話

「さて、始めますか」

私は勇者様を魔王の元に送った後、お父様とお母様と別れて今は自分の部屋の化粧台の前に座っています。

どうやらお父様とお母様は、勇者様が魔王を倒して帰ってきたときに行う、国を挙げたパーティの最終準備などで忙しいみたいなので、私も勇者様の能力と本来のお姿が分かり次第手伝いに向かうことにします。

特にお母様の元へは早く行きませんと。何故なら私と一緒に勇者様の事を調べたいと駄々をこね、お父様に咎められたのでしぶしぶながらも引き下がりましたが、「ミナお願いっ！ 勇者クンの能力と元の姿が分かったら直ぐに教えて！ 分かったら直ぐによ。ねっ、良いでしょ？ ねっねっ」と甘えるように言ってきて、私は勢いに押されて了承してしまっただからです。

全くお母様ったら、いつも私の事を子供扱いしてからかうのに、自分はたまに子供っぽくなるんですから。

勇者様の髪の毛が入った小瓶を手に取り、ジッと見つめる。

それにしても黒い髪なんて見た事が有りません。今までの勇者の髪が全て黒だったと召喚の本に書かれていた時は、その本が偽物だと思ってしまいました。でもその後次々と読んだ書物にも全く同じ事が書いてあったので、疑いながらも無理やり納得しましたけどね。

それにその知識が有ったお陰で、召喚魔法に誤作動が起きた時も、何とか勇者様を見つける事が出来ましたのでやっぱり本は大切にしませんと。

本当にあの時は慌てました。もしもその知識が無かったら、条件を通っていない適当な人を召喚する事になったのですから。

【魔王を見つけたら話を聞かずに直ぐに封印しようとする事】、【魔王を倒した後、私と一緒に国の為にまじめに働いてくれる事】などのオマケは良いとしても、【私好みのイケメンである事】の条件は通って貰わないと……。

って、そんなことより能力を調べませんとね。

小瓶から髪の毛を全て取り出し、宙に投げ、指を鳴らす。すると髪の毛は細かな光の粒子となり、化粧台の鏡の中に、波紋を立てながら次々と入っていった。

「検査対象の一部を媒体に検査を始めます。まずは検査対象の能力」

鏡は何の反応も返さない。

「検査対象、ヒロ・ウエザキの能力」

鏡は何の変化も起こさず、ただただ私を映すだけ。

？ どういうことでしょうか。普通なら鏡に文字が映る筈なんですけど。

妙ですね。召喚魔法といい、最近魔法が失敗する事が多いです。調子が悪いのか、それとも誰かが妨害しているのか……って考え過ぎですね。妨害する魔法なんて聞いた事が有りません。能力はまた後にしましょう。

気を取り直して今度は勇者様の本当の姿を。

「検査対象の召喚時における身体変化」

鏡に映った私の姿がグニヤリと歪み始め、ゆっくりとまた別の何かを映し始める。

期待に胸を膨らませて身を乗り出し、鏡に顔を近づけた。

歪んで何が何だかわからない像が人の形になってくる。

ああ、やっと勇者様の本当の顔が見

「うつ！」

慌てて顔を背ける。

一瞬だけ見てしまった鏡に映っていたのは、表現するのもおぞましい醜悪な男の顔。半秒にも満たない時間しか見ていないのにも関わらず、その顔は頭にこびり付いて離れようとしなない。

また失敗？

恐る恐る男の顔を見ないように鏡を覗くと、鏡の右端に【外見の変化前】という文字が浮かんでいた。

「？」

私は何の事が分からず首を傾げた時、再び鏡の像が歪み始め、また人の形をとる。

今度出てきたのは、先ほどの顔と比べるのも失礼な整った顔。私の知っている勇者様の顔でした。でも私が今魔法で調べたのは、勇者様が召喚によってどう身体が変わったのかで、今の勇者様の姿では無いはず。

そしてさっきの男の横にあった文字と同じ場所に、今度は【外見の変化後】という文字が浮かんでいる。

あの男の横には【外見の変化前】、勇者様の横には【外見の変化後】、もしかして、これって――

『見た目が変わったんだ』『見た目？』

「っ！！」

一瞬。体中に這いまわるような悪寒が走った。

何！ 今のは……

『そう。ミナは俺の顔を見て好きになったんだよね？ だけどそれは残片によるもので、』

「ひああっ！」

先ほどよりも強く悪寒が走る。

「あ、ああ」

何かが分かった。何が分かったのかは分からない。いや、分かりたくない。

私は慌てて先程の魔法が失敗したかどうかを調べる。

その結果。

私の前に叩きつけられたのは、正常に魔法が働いたと言う事実。

もう現実には私を取り囲んで、自分を誤魔化す事も出来なくなった。

『本当の姿はこんなにカッコ良くないんだよ』

「うそ、でしょ……」

あの男が本当の勇者……さ、ま……？

「じ、じじじゃあ私、アイツに、手を触られて告白しちゃって抱きつかれて胸に顔を埋められて頭を撫でちゃって、そ、そそそそれで、キ、スを………い、

「何故こうなった」

第十二話（後書き）

次回で第一章が終わる予定です。
博以外の視点を書くのが難しい……

第十三話（前書き）

久しぶりの投稿。

皆様をお待たせしてしまい、申し訳ありません。

第十三話

先程衛兵達に囲まれた俺は、抵抗する間もなく取り押さえられた。今は衛兵が周りを取り囲み、腕を拘束されて首に剣を当てられた状態で連行されている。

「あのー、すみません。剣をどかして貰えませんか？」

今の所、剣の扱いが上手いのか刃が当たっているにも関わらず首に傷は出来ていないが、歩く時の振動で間違つて斬つてしまつかもしない。というか、そんなこと関係無しに恐い。逃げないから首から離してくれ。マジでお願いします。

だが衛兵達は何の反応も返さずに黙々と歩いて行く。

俺は同じ事を繰り返して言ったが、反応なし。これ以上聞いても意味は無さそうだ。

はぁ、ため息をつく。

でもさぁ、何でこんな事になってんの？ ミナが俺を連れてこいつてこの衛兵達に指示をしたのか？ 確かに衛兵は食堂の時でも俺を睨めつけてきたし、乱暴に俺を連れていきそうだけど、わざわざ剣まで抜く必要が分からない。嫌がらせか？ だったらミナに会ったらずくにこいつらをクビにしてもらおう。この衛兵達や、その家族の生活等は気にしない。俺には関係無いしな。

後可能性が有るなら……。魔王の言った通り俺の顔が原因？ これも今の状況を完全に説明出来るが、あっちからキスとかをしてき

た訳だし、幾らなんでもミナがそこまで酷い事はしないと思うんだけどな。たとえ猫を被って俺を騙したとしても、それはたかが恋愛に関してだ。追放とかとは話の次元が違う。

「ミナ姫の胸に自分から顔を埋めましたよね？」

「右手、もとい魔王が話しかけてきた。」

あゝ、確かにそんな事があつたな。でも魔王が言った追放はさすがに無いと思う……。始末書とかで済むかな？ この世界に始末書があるのかは謎だけど。

「着いたぞ」

衛兵の声で、ずっと思考にふけていた俺は、はっとなる。

気が付くと俺は地下っぽい石造りの壁に覆われた通路にいた。通路の横には鉄格子が立ち並び、周りは薄暗く、通路に設置された燭台の光によってぎりぎり足元が確認できた。

はい、完全に牢屋ですね。これでミナの所に連れていかれる説は否定されたわけだ。

衛兵が目のある牢屋の鉄格子に付いた取っ手を引くと、金属がこすれる甲高い音を出しながら鉄格子のドアが開く。

「入れ」

衛兵は腕の拘束を解くと、凄みを利かせた声で命令してきた。

物凄く気が乗らないが、どうせ抵抗しても無理やり入れられる事は明白なので、しぶしぶと鉄格子の扉を通る。

牢屋の中に入ると衛兵の一人が乱暴に鉄格子を閉め、でっかい南京錠をかけた。

「じゃあ、お前らはもう持ち場に戻って良いぞ。俺はこいつの番をしているから」

一人がそう言うと、他の衛兵達はそろそろと去って行った。

「なあ、魔王。契約をしたら俺を助けてくれるってのは、本当なんだよな？」

俺は衛兵に背を向けて右手を口に近付け、小さな声でそう話しかけた。

ミナの事は信じたいが、牢屋に入れられた時点で余り雲行きは良くない。備えが有るに越したことは無いからな。

「ええ、本当です。後、封印している状態なら、喋らなくても考えた事がそのまま私に伝わりますよ。現に今私もそうして話していますし」

「じゃあ、魔王に伝えようと意識して考えればいいのか？」

「意識しなくても伝わります」

え？　じゃあ、さっきから俺の思考が魔王に駄々漏れになってるってこと？

「そうなりますね。ちなみに私は伝えたい事以外を考えない様にし

ていますので、あなたもそうしたらどうですか？」

できるか！

「お前ホントについてねーな」

急にかけられた声に振り向くと、いつの間にかヘルムを外した衛兵がニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべていた。

「いやー、勝手に召喚された上に魔王を封印しに行かされ、帰ったら処刑されるなんて運無さ過ぎだろ」

は？ 処刑？

衛兵の言葉に硬直する。

「まあ、そのお陰で俺は助かったがな。何処の馬の骨が、王女様と親しげに話しているんだと思ってお前を睨めつけてたんだが、お前が勇者だと聞いた時は心臓が飛び出るかと思っただぜ。不敬罪で処罰を受けてもおかしく無かったからな。まっ、せいぜい処刑されるまでの短い期間を楽しめよ。牢屋の中だがな」

啞然とした俺をよそに、ぎゃははと下品に笑いながら俺の入った牢屋に背を向けてあぐらをかくと、ヒザに右ヒジをつきそのまま右手に顔を乗つけると、いびきを立てながら寝てしまった。

先程衛兵が神経を逆なでる様な事を言ってきたが、いきなり言われた処刑の一言に混乱した俺には、そんな事を気にする余裕さえも失っていた。

処刑って……処刑だよな。なんで俺が処刑されるんだ？ ミナの言うとおりに魔王も封印したはずだ。なのに何で？ おかしいだろ。おかしいよな？ 何も俺は悪いことをしていないはずだ。意味が分からない。何かの間違いか？ いや、どうやったらこんな風に間違えるんだよ。故意にやったのは明白だ。だとしたら残る可能性は……。

唇の裏をギュツと噛み締めた。鉄味の液体が、唾液と混じり口の中に広がる。

「あー、じゃあこのままだとあなたは処刑されますね。それにしても、いやはや処刑とは私も予想外でした。ミナ姫の行動は読めると思っていました、過信は禁物ですね」

おい。

「何ですか？」

なんで俺が処刑されなきゃいけないのかを説明しろ。今すぐにだ。

「なんでって、あなたが不細工だとばれたからですよ」

ふざけんな。確かに好いた惚れたを顔を基準にしてしまうのは分かる。遺伝子の情報が本来のものに近いほどカッコいい顔になるらしいしな。優れた個体を判別してその血を受け継がせると言うのが、生き物の本能。それはしょうがない。

「……………」

でもそれを理由に処刑ってバカか？ 筋違いにも程が有るだろ。

殺される理由が不細工ってどんだけ理不尽なんだよ。ふざけやがって。

右手に、ねっとりとした怨みの視線を送る。

「……何を怒っているんですか？」

何って、お前。

プチッ、頭で何かが切れる音がした。

いきなり処刑されるって聞いて、怒らない奴がいるか！！

魔王の言葉にカツとなつて鬱憤^{つづいん}を晴らすように、怒りを魔王にぶちまける。

「だから、何を私に怒っているんですか？ それはただの八つ当たりですよ。そんな事しても意味は有りません」

うるさい黙れっ！ こんな怒りを消すなんて出来るかつ！

もう自分でも何を考えているのかが分からなくなってきた。今は頭に浮かんだ事を、非理性的にそのまま魔王に投げつけている。

「まーまー、そんな勿体無い事は言っていないですよ。怒りは人を動かす強い薬ですからね。今回はその怒りを忘れない方が都合が良いですし」

じゃあさっき言ってた事と違うじゃねーか！

「そんなに力ツカしないで下さい。確かに怒りを消さないでおいた方が良いと言いましたが。普通の判断は出来るようにしてくださいませんと、今の様に怒りを向ける方向を間違えてしまえます。そうなたら、ただ暴走して終わりになっちゃいますよ？」

ただただ冷静に俺を諭す。

俺は胸が膨れるほど大きく息を吸い、ゆっくりと吐き出した。

……スマン。取り乱して。

「しょうがないですよ。普通に話すのとは違って、心の中では言葉を選ぶなんて出来ませんからね。それこそ私みたいに考える内容を選別が出来ませんと」

まあ、ミナが処刑しようとする理由が顔だと決まった訳でも無いしな。理由が国を救うためとかの苦渋の選択だったと考えておこう、そうしないと怒りが爆発しそうだし。で、このままだと殺されるから、さっそく助けてくれ。

「分かりました」

魔王がそう言った途端に右手から黒い玉が飛び出して、ふわふわと浮遊し始める。しばらくすると膨れ上がって人の形を取っていき、ぶかぶかの和服を着た童女に変化した。

「あのさあ、封印を解く時に何か無いのか？ 呪文を唱えるとかそういうの」

「特にありません。強いて言うなら、あなたが封印を解く気になっているって位ですね。気絶していたり解く気が無ければ出て来る事

は不可能です」

ふーん、勝手に出てこれるんなら、封印の意味が無いと思ったけどそんな事は無かったか。

「あと、このまま話していると衛兵が気付くかもしれませんから、ちよつと失礼」

魔王は長い袖をめくり右腕を露出させる。そして開いた右手を牢屋の檻に向かつて突き出した瞬間、檻と通路の間に一瞬黒い壁が現れて、すつと消えた。

「これで向こうには、私たちの声は聞こえなくなり、あなたが一人で眠っている様に見えるはずですよ」

「便利な力だな。それも能力か？」

「ええ、もうあなたには私と契約するしかなさそうなので話しますが、私の能力は姿を隠し、遠くの者を観察し、魔法に細工する等の主に隠密を司っています。他にも色々出来ますが、大まかに言うとなんか感じですね」

ちよつと自慢げな顔をして、少し膨らんだ胸を張る魔王。

うーん、なんか魔王が持つ能力にしては地味だな。もっとこう、闇を支配するとかさー、ただの偏見だけど。

「で、このまま私の力だけで一緒に脱出するのは造作もないですけど、ある程度はあなたも手伝って下さいね」

「なんで？」

「せつかくあなたは能力を持っているんですから、早めに能力の練習をしといた方が良くないですか。あつ、もちろん失敗しても私

がフォローしますので心配なく」

「ふーん、良いけど俺の能力はなんだ？」

「心を操る能力です」

「う〜〜〜わ」

予想の斜め上に行く能力に俺は呆れた。

おいおい、手に入れた能力がよりにもよって精神操作かよ……この世界に正義の味方とかがいたら、真っ先に標的にされそうだ。

「そういえばあなたが先程、ミナ姫が本当に容姿で処刑をしたと決まった訳ではないと考えていましたが、残念ですけどそれはありません」

魔王は少しずつ下がつてきた和服を着直しながら、まったく残念じゃなさそうに言った。

「実はまた能力を使ってミナ姫の様子を見ていたんですが、ミナ姫が言っている独り言を聞くとあなたを処刑する理由が容姿だと分かりましたので」

「でも証拠がなければ信じられねーぞ」

しつこいようだが相手は魔王。そう簡単に信じてやるわけにはいかない。

「そう言われると思いました。では証拠として今から私が見ているミナ姫の様子を、脳に通信してあなたに見せます」

「そんな事が出来るのか？」

「普通は出来ませんね。でも私とあなたは封印の力によって繋がっている意味二人で一つになっているのでそれを利用すれば可能です。」

とにかく説明するよりも見てみた方が早いので早速やってみます。
ちよつとしゃがんで下さい」

封印で二人で一つつて……なんか警官と容疑者が、一つの手錠で繋がっているみたいで嫌だな。

俺は魔王に言われた通りしゃがむ。

「では」

魔王が俺にすつと手を伸ばす。そして魔王の手がおでこにそつと触れると、目に映る景色がぐるりと変わった。

城にある部屋の中でも取り分け大きな部屋、王女専用寢室に彼女はいた。

「ひつく、気持ち悪い気持ち悪いひつく、気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪いひつく、ぐずつ、気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い」

彼女はうつむけの状態でベッドに潜り、枕を両手で後ろ頭に押し付け、先程からしゃくり上げ、鼻をすりながら念仏の様に独り言を繰り返している。枕とベッドの隙間からわずかに見える金色の瞳には涙が浮かんでおり、ハッキリとした憎悪の色と、それを塗りつぶすほどの悲しみの色に染まっていた。

「なんでえ、ひつく、あんな気持ち悪い奴が勇者になってるの……」

あんな奴に私の、私の、唇を……嫌っ嫌っ！」

何かを振り払う様に頭を大きく振る。

ベッドの中から、歯を食いしばる軋むような音が聞こえて来た。

「早く処刑される早く処刑されるお！ あいつなんかあいつなんかっ！ 私を騙して穢した、醜い下種が！ 拷問する時間さえも無い、一刻も早くいなくなつて！ うう、気持ち悪い」

憎しみの籠った、悲痛な叫び声が部屋に響き渡る。

「ひつぐ、もうやだあ。おかあさまあ、ひつぐ、おとうさまあ。

何で私は、こんな酷い目に合わなければならぬのでしょうか………

……うわあああああああああ！」

再び視界が反転して、元の薄暗い牢屋に戻った。

「画質、音質、共に問題無し。通信時に少しは劣化して伝わると思いましたが、思いの外上手く行きましたね。ではこの証拠で信じて貰えますか？」

おいおいおい、何で勇者になったか？ 騙して穢した醜い下種？ 何でこんな酷い目に合わなきゃならない？ あゝあ、何を言ってるんだか。全部お前が勝手に勘違いした結果だろ。それを全部俺のせいにして、自分は哀れな被害者つてか？

俺は今まで呆然として真っ白だった頭の中を、どす黒い思考で埋め始める。

「えーと、何を黙りこくってるんですか？」

大体召喚されてから酷い目ばかり合ってるじゃねーか。初めに黒い手に追いかけれ、溺れるわ、姿は変わるわ、また溺れるわ。他にも衛兵や巨大な眼球、果てには呪のネックレス等、恐い目にも合わせられた。拳句には『どんなに醜くとも全く問題有りませんよ』と、今までの苦労なんてちつぽけに感じさせてくれた言葉も、嘘に塗り固められていたという事実が付きつけられた。

「私の声が聞こえますか？」

何かが背中をポンポンと叩く感覚がしたが気にせず思考を続ける。

で、結局召喚されてからあった良かった事は、メレムのミルク一杯だけ。あはは、何それ？

あーヤバい、もう駄目だわ。さっき収めた怒りも合わさってこれ以上は我慢出来そうにない。このままだと頭の血管が大量にブチ切れて、クモ膜下出血で軽く死ぬ。魔王に注意されたばかりだけど怒りを向ける方向を間違えて暴走しなければ良いな？ 丁度良く透明な黒い壁のお陰で、どんなに叫んでも気付かれる事は無いし。

さてと。

俺はゆっくりと牢屋の壁に足を投げ出し、背を持たせかけた。ひんやりとした石造りの壁が、徐々に体温を奪っていくのを感じながら、息を静かに吐き出すように呟く。

「何故こうなった」

第十三話（後書き）

これで一章は終わりです。後、今回の話はプロローグに繋がっていますので、プロローグを飛ばして読んでいる方は、次章を読む前にプロローグを見る事をお勧めします。まだ次話を投稿していませんけどね……。

第十四話（前書き）

また投稿が遅れて申し訳ありません。

第十四話

「ふあああ~~~~あ」

起床。腕を上^{あぐび}に伸ばし、盛大な欠伸をしつつ上半身を起こす。欠伸で出た涙を眠気半分で目を擦り拭いていると、

「えーと。起きましたのでさっそく契約について幾つかお話しします」

声をかけられた方に身体を捻り顔を向ける。そこには可愛らしい赤紫色の髪をした童女、もとい魔王が明るい声とは反して駅前の子公銅像の様な面持ちで正座していた。つられてこちらも向き直り正座をする。

「おお、で、契約は成功したのか？」

「契約は成功しましたが、ミナ王女が施した能力を封印の力へ変換する儀式が思ったよりも強力で、能力の解放が不完全になってしまいました」

ぐいと若干身を乗り出して、具体的にはどうなのかを尋ねる。

「今の状態ですと操れるのは理性で、相手の体に触れたまま十秒経つと能力が発動可能となります。ちなみにいったん離れてしまったら、また相手に触れて十秒経たないと能力が使えません。そうそう、あと感情も操れますよ。理性と感情は表裏一旦ですからね」

何か凄く微妙だ。正直相手を怒らせたり陽気にした所で役に立つとは思えない。使えろとすればお店で機嫌を良くして野菜とかを負

けて貰う位か？ いや、十秒も触れ続けなきゃいけないから無理だな。

「それって使えるのか？」

力を解放した本人だから、俺よりはましな使い方を知っているかもしれない。

魔王はちよつと考える様な仕草をし、

「色々と応用をすれば使えると思いますよ。例を出すと、理性を操って嫌いなものでも食べられるようにするとか」

俺と同レベルの解答誠に有難う御座います。勝手に期待したけどやっぱりその程度しか出来ないよなあ。

「それと今は中途半端な能力ですが、使っていけば能力がこなれていき少しずつ解放されていくので、いつかは完全な状態になると思いますよ」

ふーん。とにかくせつかく手に入れた能力だから何か良い名前を考えておくか。

「あと、契約をして私が従者となりましたのでこれから博様と呼ばせて貰いますね。それと私の名前を決めて下さい」

博様が、ちよつとむず痒く感じるが嫌な気はしない。

さて、魔王の名前は何か良いかな。軽く握った手を額に付け考え始める。意外と早く決まった。おそらく十秒も経っていないだろう。

魔王の姿を想像すると何故かスツと最初から知っていたかのように名前が浮かんだのだ。後は確認として脳内で二、三回反覆しただけ。

一生ついて回る名前にしては安直だが、名付け親を俺に選んだのが悪い。気に入らなかつたとしても俺はこれからその名前でしか呼ばない様にしよう。別にゾンビやらで俺を恐がらせた些細な仕返しという訳ではないぞ。断じて。

「じゃあルナルで」

「はい。これから私はルナルですね。では博様これから長らくお願いします」

気に入ったのか、いつもより二割程明るさを増した声でペコリと頭を下げた。つまらん。

「では次に、契約内容の確認をします」

頭を上げると声は元に戻り、接客マニュアルを昨日覚えた生命保険職員の様な口調で説明を始める。

「契約により博様が主人、私が従者という上下関係が出来ました。これにより私は博様に逆らう事は出来ず、それ以前に逆らうという気自体が起きなくなります。そして博様には私の目的であるこの国の崩壊を手伝って貰う事になります。因みに契約の強制力ですが私の方は絶対強制で、博様の方は契約による精神制御により出来る限り契約を破らないようにする位ですね」

「俺の方が有利じゃないか？」

実際の所は良く分かんが、普通契約って対等な条件で結ばれるもんじゃないのか？俺としては万々歳だが後で『実はこんな裏が

ありましたー』って言われてからじゃ遅い、しっかりと契約を把握しとかないとな。

「そうでもありませんよ。そちらの契約は国の崩落の補助という普通なら個人で実現不可能な要求ですし、出来る限りとは、死ぬしかない場合や不可能な時以外はたとえ99%で死に、1%で生き残って国の崩落が成功する場合でもその1%に賭けようと思わせる程の精神制御ですのぞ」

なるほど、確かにそれなら納得がいく。だがどちらにせよ国の陥落を目指す俺としては契約は何ら邪魔にならない以上、殆どただで魔王であるルナルを仲間に出たのと等しい。契約しておいて正解だったな。

「契約については大体こんな感じですね。まだ他にも能力の使い方などが有りますが、それはまた後でお話します。さて、処刑の時間が迫っていますしそろそろ脱出しましょう。本当は博様に手伝って貰う予定でしたが、今の能力では使えそうにもないので中止にしますね」

言い終わるとルナルはいきなり身体全体が影で包まれたかのように真っ黒になり、次の瞬間にはぱっと消えてしまった。

「ん、どこ行った？」

「ここですよ」

キョロキョロ見回していると、右手の平から声が聞こえた。なんだ、自分から封印されたのか。でも封印の力は能力に変換されたんじゃ無かったつけ？ それに前に封印した時は球体にならなかったか？

「能力の解放が不完全になったせいだと思っんですが、封印の力は全く変わらないまま残ったんですよ。ちなみに今回は封印パターン3にしてみました」

で、何で自分を俺の中に封印したんだ？

「いえ、二人でいるよりもこうして一つになっていた方が脱出するには便利ですので。それにこの状態でも能力は使えますし博様の体を動かす事も出来ます。もっとも博様がその気になっていないと不可能ですが」

勝手に両腕に力が入って万歳の体勢になる。

試しに逆らって両腕を下げようとしたら、実際に腕を下げようとするよりも先に腕が下がった。

「このように、博様が私の支配から逃れようと頭で考えたりわざわざ身体に力を入れたりする必要は無く、逃れようとする意志さえあれば勝手に支配は解けます。逆にいえば、頭で『身体をルナルに動かされないようにする』と、その気がないのにちよつと頭で考えてしまっても勝手に支配から解けてしまう事は有りません。まあ、例外は有りますがそれも後で話しましょう」

前に張った檻と通路の間の透明な黒い壁が再び現れ、消えた。おそらくルナルが能力を解いたのだろう。

「では、行きます」

俺の右腕が持ち上がり、開いた手の平から何か透明のとりと

した物が湧き出てきた。それが頭から足元まで、全身にくまなく行き渡ると俺の体は牢の鉄格子へと突き進んで行く。

檻の前まで行くと右手が鉄格子の隙間から出て南京錠に触れる。

カチャッ

軽い音と共に外れる南京錠。

音もなく開く鉄格子。

目を見開きガン見してくる衛兵。

「……………」

教訓。牢の見張りをしている衛兵は、物凄く耳が良い。

どつどつどうする！？ 目の前には身体を鍛えているであろう剣と鎧を装備した男性。対してこちらは野菜を負けて貰う程度も出来ない精神操作能力者と、魔王とは名ばかりで持っている能力が地味な童女。かなりヤバイ。

「おい！ 牢屋から元勇者が脱走しやがった！ 至急警備を整えて捕まえろ！」

慌てている俺をよそに、衛兵は応援を呼ぼうと大声を出しながら慌てて何処かへ走って行く。

あれ？ わざわざ他の衛兵を呼ばなくても、自分で捕まえれば良いのに。もしか、極度のヘタレ？ さっき散々馬鹿にする事を言っ

てたが、案外こういう奴に限って臆病なもんなんだな。

「違いますよ。私が何を司っているのか忘れたんですか？」

ああ、そういえば隠密を司ってるんだっけ。じゃあその隠密とやらで、衛兵は俺達がすぐそこにいたのに気付かなかったって事か。さっきの液体で透明にでもなったのか？

「いえ透明になるのではなく、指定した相手以外には姿から歩く音まで全く気付かれなくするだけです。一応透明にする事も出来ますが、自分の姿が見えないとぶつかったりして危ないんで、使う事は殆どないですね。じゃあさっそく宝物庫に行きますよ。脱出した後も色々お金が必要になってくるので」

了解。

誰かを必死に探している衛兵達の怒号をBGMに、俺の体は颯爽さっそうと宝物庫へ向けて走り去っていった。

「ここですね」

目の前にあるのは、一階建ての住宅縦に六つ横に五つ程の大きさが有る鉄の扉と、剣と盾の模様が彫り込まれた正六角形の錠。

何かこの錠は鍵穴が無いけど、どうやって錠を開ける仕組みなんだ？

「ふむふむ。これはこの国の王族が触れると錠が外れる仕掛けになっていきますね。ちょっと目をつぶっていて貰えますか？」

言われた通り目を閉じる。その後、身体が動いて二十歩位歩いた頃に目を開けて良いと言われた。

開いた目に映るのは、金貨、銀貨、宝石に様々な武器と何かの道具、それら全てがごっちゃになった山が山脈の様に広がった景色。

「ここがこの王国の宝物庫です」

「こりゃあ凄いな」

目の前の光景に圧倒されて声を漏らす。

「で、また鍵を開けて入ったのか？」

いつの間にか封印を解いて横にたたずんでいるルナルに質問した。

「いえ、さすがにこの錠を外すのは手が折れますし、それと扉にも結界が張ってある様なので、扉の横の壁をすり抜けて侵入しました」
「すり抜けられるんなら何でさつきもそうしなかったんだ？」

そうすれば衛兵も気付かなかっただろうし。

「それでも良かったんですが、博様がぶつかると思っただけで身体を止められるのは簡単に想像できますし、わざわざ説明するのも手間だったので。では、財宝を全部奪うとさすがにばれますので、半分ほど頂いておきましょう」

ルナルが袖を捲り手をかざすと闇の様な、霧の様な、紫色の物体が出てきて財宝の山々に覆いかぶさる。しばらくして闇が晴れると山が十程無くなっていた。

うーん。ピッキングとか大量の物を盗めるとか、隠密の他に強奪も司っていそうだ。

「では、もうここには用が無いので、これからこの国と同盟を結んでいないラムマス王国へ行きますよ」

「わかった。そういえばこの国ってなんて名前なんだ？」

「オーカット王国です」

そう言えばあいつの名前にオーカットって付いていたな。王族って名前に国の名前が付くのか。

それにしてもこの国の勇者をしていたのに名前を知らないのは勇者としてどうなんだ？ まあ、これからはオーカット王国の敵だし問題ないよな。

それじゃあ行くか、ラムマス王国へ。

第十四話（後書き）

ここまでを第一章にした方が良かったかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7723p/>

マインドルーラー

2011年11月13日19時25分発行